



レコード・オブ・
ザ・モンスター

真王の征服録

Record of the Monster

小説 ● 三紋昨夏
Story by Sakka Saumon

イラスト ● 須影
Illustration by Sakage

試し読み版

Kill Time Communication Presents
Beginning Novels Series

“Record of the Monster”

Story by Sakka Sanmon / Illustration by Sukage



Contents

序章	◆	冥主の征服録	005
第一章	◆	冥主の眷族	006
第二章	◆	冥主の策謀	056
第三章	◆	冥主の報復	146
特別編	◆	冥主の足跡	299

序章 冥王の征服録

世界の主役が人間であつたとしても、この物語の主役は魔物である。魔物の敗北が不動の理^{ことわり}で、人間の勝利が不変の結末であつたとしても、これから語られる歴史の主役は魔物でなければならぬ。

機械文明が減じるよりも遙か昔。この世界には、魔物を統べる魔王がいた。往古から語り継がれる伝承によれば、魔王は人類を脅かす不滅の大災厄だつた。最強の魔物として創られた魔王は、創造主に与えられた悪意に従つて、幾多の国々を滅ぼし、数多の命を貪つた。けれど、魔王が人類に勝利したことは有史以来、一度としてなかつた。

魔王は最強の魔物だつた。しかし、最強の人間には勝てなかつたのである。

人類を守護する超絶的な存在を、人々は勇者と呼んだ。人類の危機に呼応して登場する勇者は、それこそ反則級の力を持つ者達だつた。

古代の勇者達は有無を言わせぬ圧倒的な暴力をもつて、魔王を殺し尽くしたのである。不滅の恩寵により魔王は殺されても蘇つた。そして、勇者達は蘇つた魔王を殺し続けた。

魔王の敗北と勇者の勝利。魔王と勇者の戦いは、永遠に続くように思われた。しかし、ある時を境にして、魔王は現れなくなつた。

賢明な勇者達は、不毛な戦いを終わらせるべく、不滅の魔王を世界から根絶したのである。人類は創造主の意に反逆し、世界から魔王という概念を消し去つた。

現代に魔王は存在しない。魔王の存在は時代の移ろいと共に、人々の記憶から失われていった。

事実は歴史となり、歴史は神話となつた。常に勝利者であり続けた人類にとつて、魔王をこの世から消し去つた行為は輝かしい偉業だ。しかし、世界を管理する創造主からすれば、人類の行為は許されないことであつた。

すなわち、創造主は世界の均衡を維持するため、魔王に代わる新たな災厄を世界に出現させた。

第一章 冥王の眷族

冥王は娼婦の膣中に精液を流し込んだ。

陰茎を根本まで挿入された娼婦の膣は、魔物の精子を子宮内に誘う。

娼婦は自分が人外とセックスしていることに気付いていた。青年が射精をするのは、これで数十回を数える。薬を飲んでいたとしても、人間に可能な射精回数を超えている。大量の精液が娼婦の子宮に注がれていた。

普通であれば異常に勘付いた時点で逃げ出すだろう。しかし、甘く香しい瘴気のせいで、娼婦は正常な思考能力を失っていた。娼婦が浮かべる表情に、恐怖や痛みの色は見受けられない。

冥王に抱かれている娼婦は、至上の悦楽を堪能していた。娼婦という職業柄、彼女は性的悦楽を熟知している。多くの男と夜を共に過ごし、己の美貌と肢体で虜にしてきた。その彼女ですら、この淫楽を前にしてしまうと、理性を維持できなかつた。

女として生まれてきた者であれば、この悦楽に抗うことはできないのだろう。強い心の持ち主であっても、冥王と交わってしまうえば、性的悦楽で心を蝕まれ、魔で肉体を穢

され、魔物の子を身籠もる。

「――見込みはあると思つたが、この女も壊れてしまつたか」

冥王は落胆する。仲買人に大金を払って、この高級娼婦を買つた。入念な下調べをした上での購入だつた。それだけに期待はそこそこしていた。だというのに、もうこの娼婦は使い物にならなくなつてしまつた。

魔物の王に種付けされた娼婦の身体には、異変が生じていた。冥王の子種には、色濃い魔素が含まれている。膣内に出された精液は細胞に浸透し、人間性を塗り潰す。

冥王と交わつた娼婦の瞳は濁りきり、しばらくすると表情は虚ろになつていった。

瞳の淀みは、魂の欠損を意味する。魄に欠損があれば人格の欠落が起こる。魂魄が狂つた人間は、廃人も同然だ。肉体的には健康であろうと人格が失われれば、それは死と同義だ。冥王の伴侶となる資格を持つていなかった者は、必ずこうなつてしまう。

この娼婦に器があれば、冥王の伴侶として、魔物に転生することができた。しかし、彼女は駄目だつた。器を持たない人間は、魂が壊れて自我のない苗床に墮ちる。

「この雌は本国送りだ。これだけ種付けしてやつたんだ。繁殖母体として役立つてもらう。今は人手不足ならぬ魔物

不足だ。眷族になれずとも、苗床として血族を増やしてくれるのなら、支払った金も無駄にはならない」

娼婦は人間の女から、冥王の雌に墮とされた。眷族になれなかつた雌は自我を失う。だが、すぐには死なない。母体としての機能が尽きるまで、魔物を産む苗床となる。

膣内射精された冥王の精子は、苗床の子宮内に留まり続け、排卵を誘発する。母体が保有する卵子を効率よく消費し、精子と掛け合わせ、冥王の血族を増やしていく。

苗床化すると子産みに適した肉体に変異し、一度に複数の受精卵を作ることができる。健康で若い繁殖母体なら、一度の妊娠で五胎児以上を出産することができるようになる。

最初の妊娠期間は一ヶ月。苗床の腹が大きく膨れ上がり、出産に適した子宮に変化を終えると、その後は約七日周期で赤子を産み続けてくれる。

苗床は受精と出産を、保有する卵子と与えられた冥王の精子がなくなるまで繰り返し返す。大半の場合、先に枯渇するのは卵子のほうだ。冥王の精子は、良質な卵子を選別するので、効率よく消費していても、約一年で母体の卵子が枯渇してしまうのだ。

卵子の枯渇は、苗床としての終わりを意味する。繁殖母体は役目を終え、生命活動を停止し、安らかな死を迎える。

「これだけ精液を溜め込んでいけば、苗床としては十分だろう。そろそろ潮時だな」

冥王は娼婦の膣から生殖器を引き抜こうとした。

自我を失った娼婦は、両手で縋り付いてくる。苗床化した雌は、種付けと子産み以外の意欲オウガを失う。今の彼女にとって、冥王とのセックスを終えることは、何よりも悲しいことだった。しかし、苗床となった雌に対して、冥王は関心を抱かない。

無慈悲に陰茎を引き抜いて、ベッドに横たわる娼婦の背を向けた。冥王の陰茎は、形状こそ人間のものに近いが、その大きさは膣口に裂傷が起きない限界の太さだ。

もともと、形状は些細なことではない。冥王は自分の姿を自由自在に変身させることができる。冥王は、娼婦の膣に最適なサイズの陰茎を形成していた。

「シェリオン。後片付けを頼む。丁寧に扱ってくれよ。苗床となってしまったが、その雌も冥王の臣下だ。優秀な子を産んでくれる可能性だってある。手荒には扱うな」

「承知いたしました。ご主人様」

シェリオンと呼ばれたメイドは、娼婦の女陰に魔術符を貼り付けた。

娼婦の下腹部は膨れ上がっている。膣内に注ぎ込まれた大量の精液で、娼婦の子宮は膨張していた。シェリオンが

魔術符で女陰を覆ったのは、精液が逆流して漏れ出すのを防ぐための措置だ。冥王の精子は内部に取り付く性質があるので、大量に流れ出てきたりしない。それでも流し込んだ量が多すぎるので、少量は垂れ流れてしまう。

「この国にやってきてから、今のところ成果は得られていない。眷族の素質を持つ人間と出会うのは難しいようだ……」

これまでに冥王は数え切れないほど多くの女を犯してきた。けれど、眷族は数撃てば当たる、というものではなかった。

現在、冥王の眷族は四人しかない。眷族となれず繁殖母体と成り果てた雌の数は三桁を超える。このことから分かるのは、手当たり次第に手を出しても眷族は作れないということだった。

「眷族適性を持つ者が、これほど希少とは思わなかった。シエリオンとユファアに出会えたのは、実に幸運だった。これも冥王の悪運というやつなのか……」

「それって、前に言ってた創造主からの恩典にやの？」

冥王に質問したのは、娼婦との淫事を見守っていたユファアだ。

「俺自身もよく分かっていないから、明瞭に説明することはできない。創造主から与えられた恩典とやらは、あやふ

やな代物だ。人間として産まれた貴様達と違って、俺は最初からある程度の知識が与えられた状態で創られた。自分の能力であるとか……、使命についての知識は持ち合わせている。創造主から与えられた知識によると、冥王は幸運の持ち主だぞうだ。特に絶体絶命の時は、運が味方してくれる。幸運というよりは悪運だな。実際、シエリオンとユファアに出会った時は、かなりきつい状況だった。あの状況下なら、冥王の悪運が発動したとしてもおかしくない。しかし、この恩典がどれほどのものなのかは、分かりようがない。過信はしないほうがいいだろうな」

シエリオンとユファアは、冥王が最初に作った眷族である。シエリオンは、元奴隷の獣人族だ。牛の特徴を持つ牛族の獣人で、ある貴族が所有していた奴隷メイドだった。冥王の眷族となった後は、優秀なメイドとして仕えてくれている。身の回りの世話は、全てシエリオンに任せていた。一番最初に見出した始祖の眷族ということもあって、冥王からの信頼は厚い。

ユファアも同じく元奴隷の獣人族だ。猫の特徴を持つ猫族の獣人で、病に侵されて死にかけていたところを冥王が拾った。元々は踊り子として、ある王家に召し抱えられていたが、病に罹って捨てられた過去を持つ。眷族となつてからは、護衛として冥王の身を守っていた。

「眷族に転生できる条件ってにやんだろ？ 僕はおっぱい
が大きいことが条件だと思つてたけど、あの娼婦が苗床墮
ちしたつてことは、巨乳だけが条件つてわけでもないら
しいニヤ」

ユファの言っていることは、笑い話のように聞こえる。
バストサイズと眷族適性が比例しているというのは、あま
りにも馬鹿馬鹿しい。だが、冥王は一時期その可能性を真
剣に考えたことがあった。

実は眷族となつた四人には、ある共通点があつた。四人
全員が豊富な乳房を誇つていること。つまりは巨乳であつ
た。

特に最初の眷族であるシェリオンは、眷族の中で一番胸
が大きい。牛の特徴を持つ牛族シユテイの女は巨乳であることが多
いが、彼女は一際大きい。

シェリオンは冥王とセックスして数多くの子を孕み、そ
して産んできた。冥王の眷族となつてから、胸がさらに大
きくなつたと言つているので、冥王の魔素が胸の発達具合
に影響を与えている可能性も示唆されていた。

冥王としては不本意であつたが、ユファの熱弁に流され
て、眷族巨乳説をありえるのではないかと思うこともあつ
た。しかし、眷族巨乳説は、ある眷族により強く否定され
ていた。

シェリオンは成長期に十分な栄養を得られなかっただけ
で、魔物となつたことで本来の成長を遂げた。あるいは妊
娠と出産で肉体に変化が生じただけである。そのように三
人目の眷族サロメは、眷族巨乳説を切り捨てていた。サロ
メは理知的な女性だ。助言を与えてくれる相談役であり、
今は冥王に代わつて本国を管理していた。

「眷族巨乳説は、サロメが完全否定していた。俺もさすが
にそれはないと思うぞ」

「一時期は賛同してくれたのに酷いニヤ！」

「……あれは気の迷いだつた」

珍しく冥王は、歯切れが悪かつた。

「四人の眷族が全員同じ肉体的特徴を持つてるのに、それ
を軽視するなつて非合理的ニヤ。それに、ぶつちやけた話、
大きなおっぱいは大好きでしょ？」

「好きか嫌いかでいえば、大きいほうが好きではあるが……」

冥王は何気なくシェリオンに視線を向ける。シェリオンは
苗床化した娼婦を木箱に入れて、セックスで汚れたベツ
ドシートを取り替えていた。

メイドが淡々と仕事をしているだけだというのに、目線
の焦点は揺れる乳房に合つてしまう。シェリオンの超乳を
眺めているだけで、欲求が高まつていくのが分かつた。

「いくらなんでも俺の好みが、眷族化の必須条件だとは思わない。確かに眷族となった四人は、全員が巨乳だ。ユファの主張も理解できる。しかし、偶然四人ともそうだった。そういうことだって、十分に考えられる。この件については、サロメと一緒に散々話しただろう……」

その討論があつたのは、ユファとサロメの相手をしていた時であつた。眷族巨乳説をユファが冗談っぽく言ったところ、面白半分でふざけたことを言うなどサロメが反論したのだ。

「サロメも大きいは大いけど、四人の中だと一番小さいニャ。バストサイズが眷族の資質と比例しているなんて言ったら、そりゃ、あの子は否定するニャ。サロメはからかうと反応が豊かで面白いニャ〜」

「はあ……。頼むから、じゃれ合いは程々にしてくれ。身体の上で喧嘩をされるなんて、一度経験すれば十分だぞ」

冥王は当時のことを思い起こす。夜伽のために呼んだはずが、眷族同士で喧嘩を初め、最後はなぜか冥王の精液をより多く搾り取ったほうが勝ちというよく分からない展開となつた。

余談であるがその夜、冥王は死にかけた。四人目の眷族エリカが寝室にやってこなかつたら、腹上死していたかもしれない。

「兎にも角にも、喫緊の課題は眷族が四人しかないことだ。苗床に血族を産ませることはできる。だが、眷族が産んだ子供に比べると、苗床が産んだ子供はあらゆる面で劣っている。その上、苗床は数年もしたら卵子が枯渇して死んでしまう。持続的に冥王の血族を増やす体制を整えたい」

冥王がシェリオンとユファを伴つて、ラドフィリア王国にやってきた目的は眷族を作るためだ。

まずは娼婦を買い漁つて、眷族化を試みた。しかし、高級娼婦でさえ眷族の適性はなかった。

「ユファの言い方はアレだが……、一言で言うとその通りだな。冥王の権能は生殖能力だ。優秀な人間の雌を眷族化し、冥王の子を産ませる。ハーレムを築くのは必然の戦略だ。過去に存在していた魔王と違って、冥王は戦闘能力が低すぎる。冥王の身体能力は、眷族や血族に大きく劣っている。勇者どころか、普通の人間にも下手をすると負けてしまうくらいだ。正々堂々と戦っていたら、冥王は命がいくつあつても足りない」

創造主が冥王に与えた権能は生殖能力であつた。

人間の雌を孕ませ、強力な魔物を作る。既に四人の眷族は多くの子を産んでいる。四人の眷族が産んだ血族は優秀な魔物だ。しかし、たった四人しかない眷族を孕ませた

まだまだと不都合なことがある。

妊娠中の眷族は、冥王を守るために戦えない。眷族を増やさないことには、身動きがとれない状況だった。

——冥王ルキデイスは、人類を滅ぼすために今日も頭を悩ませていた。



冥王は、魔物の支配者だ。滅ぼされた魔王に代わる存在、新たな人類の天敵である。けれども、魔物の中では最弱と言っていいだろう。

ルキデイスの身体能力は、平均的な人間を上回る程度であつた。

「ご主人様。その積荷は私がお持ちします」

「すまないな。シエリオン。悪いが頼む。肉体労働はとことん向いていないようだ」

重たくて持ち上げられなかった木箱を、シエリオンは軽々と持ち上げ、危なげなく荷馬車に運び込んだ。

冥王には四人の眷族がいるが、冥王より身体能力が劣る者はいない。冥王の能力は、人間の雌に種付けをする生殖能力に特化している。戦闘は眷族や血族に任せるしかない。冥王の魔を受け入れた雌は、最上級の力を持つ眷族となつ

て、冥王の身を守る最強の兵となる。けれども、眷族になれる素質がある者は少なかった。

「さすが牛族のメイドさんだ。女性でも力持ちだねえ。ところで、あの木箱には何が入ってるんだい？」

ルキデイスとシエリオンのやりとりを見ていた荷馬車の御者が、半笑いで話しかけてきた。

「中身については教えられない。だが、貴重品だ。傾けないように注意してくれ。事故があつても木箱は絶対に壊れないようにしてあるが、杜撰ずさんに扱つてほしくはない」

荷馬車に積み込んだ木箱の中身は、苗床となつた娼婦だ。荷馬車の行き先はサピナ小王国。人類は気付いていないが、サピナ小王国は冥王の支配下にある。娼婦は死ぬまで冥王の血族を産んでくれるだろう。

繁殖母体となつた雌は箱に詰め、荷馬車でサピナ小王国に送ることになっていた。ラドフィリア王国で魔物を産まれても、後の処理に困るからだ。本国であれば生まれた魔物を隠すことは容易だ。

「重ねて言うが木箱の中には、我が国にとって貴重なものが入っている。事故にだけは気を付けてくれ。安全第一で頼む」

荷馬車の御者はルキデイスの言葉に頷く。荷馬車はゆつくりと発進し、通りの向こうへと消えていった。

木箱を運んでいる荷馬車の御者は、サピナ小王国の正式な外交官である。

慣例上、外交官が運ぶ荷物は検査されない。木箱の中に魔物の赤子を宿した娼婦が入っていると、外交官が運ぶのなら関所で露見することはない。それでも、心配性の冥王は念のため、木箱を開封できないように魔術式を刻み込んでいた。

「本国のサロメとエリカは、上手くやっているだろうか……」

サピナ小王国は、ラドフィリア王国の隣にある小国である。約一年前、一斉蜂起した奴隷達によって革命が起こり、国王が処刑された。今は革命軍が女王を擁立し、新たな政府となってサピナ小王国を治めている。

――表向きには、そうなっている。だが、実際は違う。

虐げられていた奴隷が蜂起したのは、ルキデイスが裏で工作した結果だ。民衆の意思による革命ではなく、魔物の暗躍によって革命は起こった。サピナ小王国を支配していた愚かな王と貴族を、革命の名の下に皆殺しにして、ルキデイスは自らの国を手に入れた。

革命が成功したのは、ルキデイスが魔物を使って革命軍を支援したおかげであった。魔物の暗躍がなければ、革命

は失敗に終わるところか、始まりすらしなかっただろう。サピナ小王国の民衆は、この事実を知らない。そして、知る必要もない。

ルキデイスは王侯を処刑した。けれど、国民に対しては寛大な統治を行っていた。身分差を解消することに努め、国全体が豊かになるような政策を実施している。革命以前の統治があまりにも酷すぎて、サピナ小王国の国家基盤は未だ脆弱だ。けれど、徐々に国民の生活は向上している。

革命から一年が経って、やっと混乱が収束しつつある状況だ。不思議と不満の声は少ない。人間という生き物は、希望があれば多少の苦勞は気にしないようだった。

「さてと、祖国のため頑張るとしようか」

表向きのルキデイスは、諸外国を放浪している学徒ということになっている。外国の優れた知識と技術を持ち帰ることを名目に、国費でラドフィリア王国に滞在していた。

実際のルキデイスはサピナ小王国の支配者であり、その正体は魔物の支配者である。だが、そのことを知るのは眷族だけだ。何も知らずに木箱を運んでいる外交官など、多くの人間を利用して、魔物の王は暗躍していた。真実を知らない者はルキデイスのことを、異国の地で奮闘している国士だと尊敬している。

その評価が大間違いというわけでもない。ルキデイスは

ラドフィリア王国で学んだ知識を、本国に送り届けていた。ラドフィリア王国は、サピナ小王国とは比べ物にならない国力を誇る大国である。この国で学べることは多い。

それだけではない。ルキデイスはラドフィリア王国で見つけた優秀な職人や学者を、ヘッドハンティングしていた。大国では技術者や知識人が多く、競争に敗れて、優秀な能力を持っていても仕事にありつけないことがある。そういった人材を、サピナ小王国は必要としているのだ。

長らく愚王の圧政が続いていたサピナ小王国では、教育というものがなされておらず文盲率が高い。外国から優秀な人材を招かないと、自国民の教育すらままならない状況だった。

「今日も職人組合で人材発掘をなさるのですか？」

「人材確保は急務だ。職人だけじゃないぞ。文官もだ。革命の時に官僚を少し殺しすぎた。確固たる支配体制を実現するためには、旧支配階級の粛清が必要だった。必要な措置ではあったが、国務に携わる人材に関しては、少しくらい残しておくべきだったな……」

「私達が産んだ子供では駄目なのでしょうかね？」

苗床化した繁殖母体が産む子供と違い、眷族が産む子供は能力が高い。妊娠期間が伸びるものの、人間に擬態できる魔物を産むこともできた。

「サピナ小王国は俺達の隠れ蓑だ。いくら化けるのが上手い魔物でも、ばれる時はばれる。冥王や眷族は完璧な擬態ができるが、血族はそうじゃない。ちよつとした失敗で、国を支配しているのが魔物だと露見したら、今までの苦労が水泡に帰す。今は人間の力だけで、サピナ小王国を復興させなければならぬ」

冥王の使命は、人類を滅亡させることだ。

その冥王が、人間の国を栄えさせるために腐心しているのは、実に皮肉なことであった。



ラドフィリア王国の都ベイタナ。王都の治安を守る兵士は二種類いる。憲兵と警備兵である。憲兵のほうが行政的な階級は上で、警備兵は重要ではない雑事などを主な職務としていた。

憲兵になれるのは優れた出自の者だけ、平民出身者が憲兵に昇格することはまずない。一方で警備兵は武器が扱えれば誰でもなれる雑兵だ。警備兵は出世しても憲兵に従う下っ端でしかなかった。

「娼婦の名前はアマンダ・ヘイリー。娼婦達によれば、消えたのは彼女で十四人目だぞうだ。娼婦が行方知れずとな

るのは、珍しいことじゃない。しかし、今回のような消え方はちょっと異常だ。何の前触れもなく、痕跡すら残さずに娼婦が次々にいなくなっている。それが、この一ヶ月で十四人だ。一度に複数人が消えたこともあるが、平均すると二日に一人のペースだ」

娼婦が犯罪の被害者になるというのは珍しくない。普通の暮らしをしている市民が、突然いなくなれば事件だ。しかし、娼婦が消え始めても最初は誰も騒がない。大事になつてから、やっと世間が気付き始める。

この異常事態を警備兵団が把握したのは、娼婦アマンダ・ヘイリーが失踪してからだつた。

「貧民街の犯罪組織が関与しているのでは？」

警備兵のシルヴィア・ローレイは、険しい表情で支部長に質問する。一ヶ月で十四人の娼婦を誘拐する理由は分からないが、組織的な犯行に違いない。

「さあな。今は何も分からない……。川に切り刻まれた娼婦の死体が浮いていれば、殺人鬼がいるということになるし、葉漬けの娼婦が発見されれば貧民街の犯罪組織ってことになる。だが、まだ何も分かつてない。いいか、今回は消えているだけだ。死体だつて一つも出てきていない」

「死体が出てきたら、憲兵団の管轄になるので好都合です」
「シルヴィア、絶対に憲兵団と争いを起こすなよ。警備兵

団は憲兵団の下つ端だ。身の程を弁^{わか}ま^まえろ。憲兵と張り合えるのは、王立騎士団くらいなんだ。俺達は騎士じゃない兵士でもない。使いつ走りでもいいのさ。低い場所で、腰を低くして働く。それが良い警備兵つてもんだ」

「私はそう思つてませんから」

「ああ、そうかい。どうでもいいがね。とにかく、聞き込みで娼婦の足取りを追え。娼婦の中には、そこそこ稼ぎがあつて自ら失踪するのは考え難い者もいた。いなくなった娼婦達に、これといった共通点はなし。失踪した娼婦同士に繋がりはなく、出身地域もばらばらだ。共通点があるとすれば、胸が大きくて若いというくらい……。おつと、こりゃ不味い！ つまりシルヴィアみたいなエロい身体だつたわけだ。お前も気を付けろよ」

シルヴィアは上官を睨み付ける。

「そんな顔をするな。部下を心配してやつてるんだぞ。犯人が胸の大きい娼婦を好んで拉致しているかもしれないだろ？」

「ブライアン支部長!! いい加減にしてください。さすがに怒ります! この事件は十四人も失踪しています。一般的に考えて、組織的な犯罪を疑います。なぜ警備兵団はもつと力を入れて捜査しないのですか!?!」

「事件だつて……? まだ決まつてないだろ。死体が出て

きていない。消えているのは娼婦だぞ。どこぞの金持ちと仲良くやっているかもしれないだろ。警備兵団も憲兵団も、現段階で事件性があるとは考えていない。とはいっても、さすがに消えた人数が多い。そこで警備兵が情報を集めると、憲兵団から命令が来た」

「通達と言うべきでは？ 警備兵は憲兵の奴隷になったのですか？」

「通達つてのは、要するに命令だ。六日前に失踪したアマンダ・ヘイリーは、お前の担当地区で目撃されている」

「ペタロ地区で……？」

「王都ではそこそこ売れてる高級娼婦だったらしいぞ。こんなことになるなら、俺も一回くらい買っておけばよかった。二ヶ月分の給料が吹き飛ぶが……、惜しいことをした」

「支部長は結婚されて、お子さんもいたはずでは……？」

「あゝ、さっきのは冗談だ。今の発言は忘れろ。上官命令だぞ。命令は絶対だぞ？」

「……………」

「ごほんっ！ シルヴィアに頼みたいのは、聞き込みだ。情報収集以上のことはしなくていい。気になることがあったとしても首を突っ込むなよ。殺人事件に発展するなら、管轄は警備兵団じゃない。憲兵団だ」

警備兵になって二年目となるが、いつもそうだった。手

柄を挙げる機会に恵まれても、いつだって憲兵団に成果を献上することになる。

「仕方ないだろう。何度も言わせるな。我々警備兵は雑兵だ。憲兵団を差し置いて、大事件を解決してしまつたら、関係が拗れてしまう」

支部長は憲兵に服従することに慣れきっていた。若い頃はプライドがあつたはずだ。しかし、この歳になるとそんなものはなくなる。

頭を下げて、腰を低くしていれば、それだけで面倒事は回避できるのだ。事を荒立てることなんか考えない。しかし、血気盛んな若い警備兵は、支部長が失つた野心を瞳に宿していた。

「分かりました。それではペタロ地区の家々を訪問して、聞き込みを行います」

「シルヴィア。余計なことはするなよ？ やるのは聞き込みだけだからな」

「分かってます。支部長……」

「無茶もするなよ。犯罪組織が関与していると分かつたら、すぐに支部に戻ってこい。それと、何があつても貧民街には近づくな。貧民街は担当の憲兵長が交代してから、治安が悪化しているらしい」

「支部長、くだいです!! 私はもう子供じゃありませんか

ら！」

「大人の女だから、注意しろと言っているんだ。周りの男からどういふ風に見られているか、自覚しておけ。本意であろうが、自衛意識は必要だ。シルヴィアの腕っ節は認めるが、自分の力を過信するな」

「余計な心遣いありがとうございます」

シルヴィアは支部長から、事件に関する資料を奪い取る。その場で添付されたアマンダ・ヘイリーの写し絵を見た。支部長の言った通り、胸は大きめに見える。しかし、女性のシルヴィアは写し絵に描かれた彼女が、胸パッドでバストサイズを大きく偽っていることに気付いた。

（売り文句は美乳の娼婦……？ 張り合うわけじゃないけど、この子より私のほうが大きいし、おっぱいの形だつて整つてる気が……つて、もうっ！ 私つては何考えてるのよ）

資料によると、アマンダは路上で客待ちをするような売り方はしていなかった。小金持ちの商人がわざわざ屋敷に呼ぶような高級娼婦だった。金銭的に困っていた様子はなく、失踪する理由が見当たらない。しかし、アマンダは六日前に出かけ、それきり行方不明となった。

アマンダの常客だった商人が、憲兵団に相談してやつと兵士が動いた。動いたといっても、憲兵団が警備兵団に調

べておけと通達を出しただけである。だが、それでも何もしないよりはいい。シルヴィアは、アマンダが最後に目撃されたベタロ地区へ赴く。

ちょうどその頃、サビナ小王国に荷馬車が到着した。

荷台に積み込まれた木箱に箱詰めされているのは、冥王に種付けされた繁殖母体。苗床の胎は大きく膨張して、赤子を産むのに適した肉体へと変化しつつある。約一ヶ月かけて苗床の肉体は完成するだろう。

そして、死ぬまで冥王の子を生み続けるのだ。彼女は六日前までは人間だった。肉体的には生きているが、人格は失われ、魔人と化している。

人間だった頃、彼女には名前があった。その名はアマンダ・ヘイリー。



王都の空が赤く染まり始めた夕暮れ時に、その客はやつてきた。

革鎧を着た女警備兵は、名前をシルヴィア・ローレライと名乗った。髪は黄金色で、瞳は澄んだ緑色。顔立ちはとても端正で、美女と呼んで差し支えない容姿だ。年齢は二十歳手前といったところ。数年前の彼女は、美女ではなく

美少女であつたはずだ。

革鎧で胸部を押さえ込んであるものの、ルキデイスはシルヴィアのバストサイズを知覚できていた。

冥王には、種付け対象のポテンシャルを読み取る能力が備わっている。年齢だけでなく、身体がどれほど成熟しているかなどの情報を分析できる。

本音を言えばこんな能力よりも、普通に身体能力を高くしてもらいたかつた。しかし、冥王の力は生殖に特化している。これも優秀な雌を選ぶための能力だ。

姿を自由自在に変化させる能力でさえ、人間を惹き付けるための力だ。冥王は〈変幻変貌〉によって、様々な姿に変身できる。だが、強大な存在に化けても、所詮は張りぼての姿だ。

どんな姿であれ、基礎的な身体能力は変わらない。腕っ節の強い人間と腕相撲をして、ぎりぎりまで負けるのが冥王の身体能力だ。それが冥王という最弱級の魔物だつた。

「驚きました。ラドフィリア王国の都はとてよ治安がいいと聞いていたのに……。この女性が行方不明なんです。可哀想に」

「東区の歓楽街に住んでいた女性で、六日前にこの近辺で目撃されています。彼女に見覚えはありませんか？」

自宅を訪ねてきた女警備兵は、行方不明者を探していた。

見せられた写し絵には、数日前に本国送りにした娼婦の姿が精巧に描かれている。

この娼婦に何が起こつて、今現在どうなっているか。ルキデイスはこの世の誰よりも知っていたが、知らないふりをする。

「いえ。残念ながら、見かけていません」

「話が変わりませんが、ルキデイスさんは一ヶ月前に引越してきたばかりと聞きました。出身は隣国のサピナ小王国とのことですが、なぜラドフィリア王国の都に引越してきたのですか？」

この数日間の聞き込みで、シルヴィアは有益な情報を得られていなかった。家々を訪ね回つて、徹底的に聞き込みをした。しかし、アマンダ・ヘイリーについての情報は得られなかつた。

娼婦はどこに消えたのか。依然として手がかりが掴めていない。しかし、ある住人が一ヶ月に引越してきた人物がいると教えてくれた。娼婦が消え始めたのも一ヶ月前である。何か関連があるのではないかと思つたシルヴィアは、隣国から引越してきたルキデイスという青年が住む家を訪れることにしたのだ。

「国の仕事です。サピナ小王国は、革命が起こつて政権が変わりました。今も改革の真つ最中です。有能な人材を見

つけて、サピナ小王国で働いてくれないか勧誘をしています。技術者や知識人が不足していて、我が国はとも困っているのです。ラドフィリア王国と違ってサピナは小国です。国内で人材を育てるほどの余裕がありません。そうすると外部から招くほかない。祖国を復興させるためのヘッドハンティングですよ」

「移民を募集しているということでしょうか？」

「移民だけでなく、帰国事業もしています。かつてのサピナ小王国は、愚劣な王が統治をしていました。獣人を家畜扱いして、外国に売り飛ばす……、本当に酷い社会環境だった。まだ国の傷は癒えていません。売り飛ばされたサピナ小王国の民を買い戻し、自由を与える。民から奪ったものを全て返す日まで、サピナ小王国の傷は癒えません」

「売られた国民を連れ戻しているのなら……、たとえば娼婦を帰国させたりもしますか？」

「あると思いますよ。売られた先で娼婦に身を落とした獣人は多い。身体を売ることを強要された人もね。自分の肉親が、娼館に売られて行方知れずになっているというのは、珍しいことじゃありません。特にうちの国ではね。離れ離れになった家族を再会させる。そのための帰国事業でもあります」

「名簿などがありますか……？」

「それならサピナ小王国の大使館に問い合わせてください。俺は外部からサポートしているだけで、正式な外交官というわけじゃありません。外交官のようなことをしますが、単純に人手不足だけです。そういった名簿は外交官が管理しています。大使館に行けば、すぐ分かります。移民の募集は、ラドフィリア王国の許可を得た上でやっているはずなので、移民や帰国の事業記録は絶対に保管されているはずですよ」

質問に対する答えは完璧だった。シルヴィアは怪しい点は特になくと思ってしまう。

ルキデイスは、絵に描いたような好青年だ。屈託のない笑顔で、シルヴィアの質問に快く答えてくれた。嘘をついているような素振りはない。けれど、連続失踪事件が起り始めたのは一ヶ月前。この青年がやってきたのも一ヶ月前だ。

そして、アマンダ・ヘイリーが最後に目撃されたのはこの近辺。全てを偶然であると言い切るのは早計に思えた。

「近所の方から聞いたのですが、ルキデイスさんには同居人がいますよね？ その同居人からお話を伺いたいのですが、よろしいですか？」

「同居人……？ ああ、シェリオンとユファのことかな？ 彼女達に話を聞くのはかまいませんよ。俺が見ていないの

なら、多分彼女達も知らないと思いますが……。しかし、聞いてみたら、何か知っているということもありえるかもしれない。そういうことなら、さあ、どうぞ。家にながつてください」

ルキデイスはシルヴィアを家に招き入れた。シルヴィアは少し迷った。支部長の忠告が脳裏を掠める。もしルキデイスが悪しき人物なら、家に入り込むのは危険だ。

「どうしたんですか、警備兵さん。我が家は土足でかまいませんよ」

「いえ、何でもありません」

仮にルキデイスが悪人でも、強者ではないとシルヴィアは感じていた。いざとなれば逃げるくらいはできるだろうと考えて、シルヴィアは家に足を踏み入れる。

ルキデイスが住んでいる家は王都では珍しく、広い庭付きだ。所有しているのはサピナ小王国で、国費で遊学している自分に貸し与えられていると、ルキデイスは説明してくれた。

サピナ小王国の所有物件というだけあって、内装は綺麗で平民が暮らす家より遥かに豪華だった。

「シェリオン。こちらは警備兵のシルヴィアさんだ。俺達の住んでいるペタロ地区を担当している」

「ようこそ、いらっしやいました。私はルキデイス様にお

仕えているメイドのシェリオンと申します。お見知りおきください」

現れたメイドの美貌に、シルヴィアは魅せられてしまった。シェリオンと名乗ったメイドは、牛の角が生えた獣人の美女だった。

この世界において、使用人の容貌は重要なステータスだ。容姿が優れているという理由だけで、出自や階級をすつ飛ばして、大貴族に召し抱えられる使用人だっている。使用人の見た目目で、主人の階級が分かることもある。

シェリオンは高級感のあるメイド服を着用しており、その仕草は洗練されていた。

(ひよつとして、ルキデイスさんは身分を隠した大貴族だつたり……?)

家の中を観察すれば、ルキデイスがどんな暮らしをしているのか分かる。間違いない貧相な暮らしはしていない。

「ユファを客間に呼んできてくれ。シルヴィアさんは、二人に聞きたいことがあるようだ」

ルキデイスは、シェリオンにもう一人の同居人を呼んでくるように命じた。

「大丈夫ですか？」

「ん？ どうした……？ お茶と菓子くらいなら、俺でも出せるぞ。心配しなくても一人で大丈夫だ」

シエリオンの確認は、ルキデイスの安全を考えたことだった。

実は玄関でルキデイスとシルヴィアが話している時も、シエリオンは近くに控えていた。正体がばれていないとはいえ、大切な主人を敵と二人きりにするのは、危険な気だと考えたのである。

「過保護だな。ティーポットをひっくり返したりはしないさ」

「かしこまりました。すぐにユファを連れて戻ってきます。少々、お待ちください」

シエリオンがユファを連れてくるまでの間、シルヴィアは客間で待たされることになった。ルキデイスはシルヴィアにお茶と茶菓子を出して、サピナ小王国のことについて語った。

サピナ小王国は一年前の革命で混迷を極めた。その際、隣国ラドフィリアの支援のおかげで、国家の破綻という最悪の事態は回避できた。

もともと、それが純粹な善意による支援でないことは、万民が知っている。緩衝国であるサピナ小王国の完全崩壊をラドフィリア王国が懸念したこと、さらに大量の難民が押し寄せることを嫌がったから、莫大な支援が実施された。しかし、不純な動機であれ、ラドフィリア王国の支援がな

ければ、サピナ小王国は未だに混乱の渦中であつたはずだ。ルキデイスはサピナ小王国の人間として、感謝の言葉を重ねた。

「さっきのメイドさんは、ルキデイスさんの奴隷なのですか？」

もしそうだとすれば、ルキデイスはサピナ小王国でそれなりの地位を持つ人間ということになる。単なる学徒に家を与えて、さらに使用人まで付ける。それはちよつと不自然に思えた。

「いいえ。シエリオンは大切な家族です。サピナ小王国は、奴隷廃止を目標としています。シエリオンは奴隷でしたが、今は違います。と言つても困ったことに、彼女はこちらの努力に反発しているようで、様付けで呼ぶのは絶対に変えてくれません……。牛族シエティアの獣人は頑固なんですよ。シエリオンの気性はまさしく牛です。言つておきますが、これは褒め言葉ですよ。おとなしそうですが、怒ると恐ろしい。拘つていることに関しては、とても保守的で頑かたなだ」

「ひよつとしてルキデイスさんは、貴族なのですか……？ 暮らしぶりを見ている限りでは、とても平民とは思えません」

「貴族であり、貴族ではない。なので、どちらとも言えません。妙な言い回しに聞こえましたか？ 俺は貴族の地位

を捨てて革命に参加した人間なんです。地位を捨てたので、貴族の生まれですが貴族ではないということになります。革命後、サピナ小王国で富を持っていた貴族は、処刑されているか、国外へ亡命しています。そうでなければ、俺のように革命軍側に付いて貴族であることを捨てているからです」

もちろん、この説明は嘘だ。ルキデイスは人間ではなく、魔物として生まれた。

ただし、サピナ小王国の貴族に成りすまして、革命を後押ししたのは本当である。

「ご主人様。ユファを連れてきました」

シエリオンが連れてきたのは、頭から猫耳を生やした猫族の少女だ。やはりと言うべきか、彼女もシエリオンと同じく美しい。

二人ともすぐ綺麗、それに胸が大きいわ。行方不明になった娼婦も胸が大きかったって聞いているけど……

連れてこられたユファは、シエリオンと違って堅苦しいメイド服は着ていない。挑戦的な露出が多めの服装だ。着用している衣装で判断すると、使用人という感じはしない。

「僕はユファ。はじめましてニヤ！」

態度もシエリオンと正反対で碎けている。見かけ通りの軟派な口調で挨拶してくれた。

「はじめまして。ユファさん。私はペタロ地区を担当している警備兵シルヴィアです。えつと……、ユファさんは失礼ながらメイドのようには見えませんか。お仕事は何を？」

「家事手伝いという名の遊び人なのニヤ。昔は奴隷だったけど、革命のせいで失業しちゃった。どこかの誰かが奴隷解放宣言をしてみたせいニヤ」

「はっははは……。ユファは辛辣だな。ユファのように奴隷制廃止をよく思っていない者もいるんですよ。いきなり奴隷を辞めると言われても、生まれた時から奴隷だった者は、どうしていいか分からなくなってしまう。本当は革命後すぐに奴隷を廃止するはずでした。今も完全廃止できないのは、こういった事情があるせいです」

「人間に必要なのは自由よりも衣食住ニヤ。それで、警備兵さんが僕達に聞きたいことって何なのニヤ？ ちなみに、迷子の猫探しなら僕はすつごく得意ニヤ！」

「いえ、猫探しではありません。人を探しています。この近辺で行方不明になった女性です。こちらの写し絵を見てください。彼女はアマンダ・ヘイリー。六日前に失踪しました。彼女を含めて十四人の女性が行方不明となっています。有力な情報は乏しいのですが、六日前にアマンダさんは、ペタロ地区で目撃されています。シエリオンさんとユファさんは、どこかでこの女性を見かけたりしていないで

しようか？」

「いいえ。この近くでこのような女性を見たことはありません。ユファはどうですか？」

「僕も知らにやい。どこかで見てても多分覚えてないニャ」

写し絵を見ながら、二人は首を横に振った。

「そうですね。それなら、ここ最近で何か変わったことはありませんでしたか？　どんな些細なことでもかまいません」

「変わったことと言われても、僕達は引越してきたばかりなのニャ。こつちに来てからは新しいことの連続ニャ。以前と違ったことを聞かれても、僕らには分からないニャ」

ユファの言うことはもつともである。三人はサピナ小王国から引越してきたばかりなのだ。何が変わったことであるかなど、分かりようがない。シルヴィアは自分の質問が、明らかな失当であったことを恥じる。

「この家の前に荷馬車がよく停まって、荷物を運んでいると近所の住人から聞きました。何かをサピナ小王国に運んでいるのですか？」

「運んでいるのは専門書です。最近では農薬だとか、農法の書籍を本国に送りましたね。とち狂った貴族が大書庫を燃やしてしまったので、技術書が不足しています。なので、

こつちで買いつけた書籍を本国に送っています」

「なるほど。書籍ですか……」

「ひよつとしたらと思つて、この家に来ていたシルヴィアはちよつとだけ落胆する。」

前のめりになって調べていたが、この三人からは何一つとして不審な点が見つかからない。一ヶ月前にルキディス達が引越してきたこと、そして馬車で大きな荷物をどこかに運んでいると、近所の人達から聞いた時、これはもしかするのではと思つた。

悪い予感が外れるのはいいことだ。けれど、憲兵団より先に、この事件の犯人を突き止めることができれば、警備兵シルヴィア・ローレイの評価は鰻登りとなつたはず。それだけに空振りは残念だった。

「警備兵が動いているということは、この連続失踪事件は大事になつていくんですか？」

「いいえ。もし大事になつていたら、私のような下っ端警備兵じゃなくて、憲兵団が動いています。上は事件性があるとは思つてないみたいです。現段階では聞き込みをして、情報を集めているだけです」

「もつと大規模な捜索をしたほうがいいのではありませんか……？　十四人も女性が消えている割には、ちよつと初動が鈍すぎる気がしますね」

「まだ行方不明ですから。死体が出てきたわけじゃないので、腰の重い憲兵団が動くはずありません。警備兵だって今も聞き込みをしているのは、私くらいなものです。こういう行方不明は、よくあることです。借金取りから逃げるためだとか、駆け落ちだとか、単なる家出とか……。行方不明になった十四人の女性達は、横の繋がりがないので単なる偶然ってこともありえます。協力いただきありがとうございます。お茶までご馳走になってしまつて。この紅茶、とても美味しかったです。いつまでもお邪魔していたら、迷惑になってしまいます。私はもう帰りますね」

「いえいえ。迷惑だなんて、とんでもない。警備兵のお仕事、頑張ってください。この連続失踪に事件性があるにしろ、ないにしろ……。いなくなつた『娼婦』が早く見つかることを祈つてます」

ルキデイスは、意味有りげに微笑を作る。

——警備兵シルヴィア・ローレライは、気付いてしまう。彼女はこの家に来てから、『娼婦』が行方不明になつているとは言っていない。

行方不明になつた女性達の職業は、あえて話題に出さなかつた。だというのに、ルキデイスは『娼婦』と口にした。

「あの、すいません……。もう帰りたいんですけど、そこを退いてくれませんか？ シェリオンさん」

シルヴィアは客間から脱出しようとするが、退路をシェリオンが塞ぐ。不穏な空気をひしひしと感じていた。

立ち塞がるシェリオンは無表情で、シルヴィアに強い視線を向けている。

対照的に、ユファは蜘蛛の巣に引っかかった蝶々を眺める猫のようだ。ニタニタと嘲笑するかのような顔付きである。

家主のルキデイスは、好青年の仮面を被つたままだが、室内の雰囲気は一変していた。

「こういう時は、二人一組で行動すべきだ。そして、相手に情報を与えるべきでもない。沈黙は金、雄弁は銀と言うだろう？ 貴様が教えてくれた情報が事実なら、まだ憲兵団は動いていない。警備兵団すらも本腰で捜査していない。まあ、さすがに動き出す頃合いだとは思っていた。娼婦を短期間で使い潰しすぎた。そこは反省しなければな。教えてくれて本当に助かつた。貴様が来てくれたおかげで色々なことが分かりそうだ。感謝する。ぜひ、礼をさせてくれ。」

——シルヴィア・ローレライ

身に迫る危機を感じ取つたシルヴィアは、腰のレイピアに手を伸ばした。しかし、敵意に反応したシェリオンは即座に距離を詰める。

「うぐっ!？」

シルヴィアの腹部に、シエリオンの正拳が叩き込まれる。殴打の衝撃は革鎧を貫通し、鳩尾を直撃した。

冥王の眷族となったシエリオンの筋力は、人間の限界を超えている。本気の一撃であったのなら、シルヴィアの内臓を破裂させるどころか、胴体を貫通する威力となつていただろう。

くらつたシルヴィアにとっては重たい一撃であるが、シエリオンとしては手加減をした一撃だ。目的は生け捕りである。シルヴィアに死んでもらつては困るのだ。

「ううっ……!!」

吐き氣と痛みで、シルヴィアの意識が喪失していく。朦朧として視界が揺らぐ中、ユファの笑い声が頭に響いた。「ニヤハハハハハ。これで今日から君も家族ニヤ！」



—— 俺の恋は、一目惚れで始まつた。

最初に会つた日のことは今でも覚えていゝる。同じ地区に研修派遣された時、俺は彼女に出会つた。

美しい金髪、透き通つた緑色の目、凛々しい顔立ち。彼女にいいところを見せようとして空回りしてしまい、教官に叱られたのは苦い思い出だ。

あれから二年が過ぎた。まだまだ新人ではあるが、整備兵の仕事には慣れてきた。俺は今年で十八歳になる。そして彼女もきつと十八歳だ。恋人がいないことは既に調査済みだ。

「よし！ よし！ 今日こそやってやるぞ!!」
俺は氣合を入れる。彼女を食事に誘つて、告白をするのだ。

計画は完璧だ。今日、この日のために、入念な準備をしたのだ。彼女は支部長の部屋で話し込んでゐる。おそらく噂になつてゐる失踪事件の調査報告をしているのだろう。聞くところによると、彼女の調査は不発に終わったそうだ。諦めずに、彼女だけはずつと聞き込みを続けていたそうだが、ついに心が折れたらしい。なら、傷心の彼女を慰めることにもなる。

「……遅いな。何を話してゐるんだろ？」

めぼしい情報を得られなかつた割には、長く話し込んでゐる。早く出てこないかと、そわそわしてしまふ。支部長の部屋から出てきたら、すぐさま彼女に話しかけるつもりだ。

「—— それでは支部長、今までお世話になりました」

彼女が支部長の部屋から出てきた！



理由は分からないが、今日の彼女は私服で出勤してきた。ラドフィリア王国の警備兵に与えられる革鎧の制服を着ていない。今の彼女は、身体のラインが浮かび上がって、一層魅力的に見えた。

「な、なあ！ ちょっといいか？ 実はさ！」

「ごめんなさい。今日は急いで帰らないといけないから……」

俺の完璧だったはずの告白計画は、始まって数秒で躓いた。

彼女は俺に顔をすら向けずに、早歩きで出て行ってしまった。こんなことは今まで一度もなかった。いつもの彼女らしくない。よく分からないが、今日の彼女は俺の知っている彼女とは違う気がした。

「はあ……。聞く耳持たずか。やれやれだな。おい、ジャン。お前は何か聞いてないか……？ お前はあいつと同期だったろ？」

俺が呆然と立ち尽くしていると、部屋から出てきた支部長が俺に尋ねてきた。

「何がですか……？」

「何が……。呆れたもんだ。お前とは親しそうだったのに、何も聞いてなかったのか？ あいつは、警備兵を辞めるそうだ。何があったのかは知らないが、さつき辞表を

出してきたよ。少し考えるように言ってやったんだが、押し付けられてしまった……」

「えええ!? 辞表……っ!? はあ!? なんて!? 支部長! 辞めるってどういうことですかっ!?」

「それは本人に聞いてくれ。辞表を突きつけられた俺だって困ってるんだ。何を聞いても一身上の都合としか言っつてこなかった。しかも、職場や寮にある私物は全部処分してもらってかまわないと言うんだ。一体あいつに何があったんだ……? ついこの間まで、失踪事件の聞き込みを熱心に行っていたと思ったら、今日はいきなり辞表だ。若い女でもするのかね」

「そお、そんなはずありません!!」

俺はすぐさま駆け出して、支部から出ていった彼女を追いかけた。後ろで支部長が、何かを言っていた気がするが、そんなことはどうでもよかった。

警備兵を辞めるなんて絶対にありえない。彼女は功績を立てて騎士になることを夢見ていた。その彼女が警備兵の仕事を取り出すなんて、何かの間違いに決まっている。

「——シルヴィア!!」

後を追いかけた俺は、『シルヴィア・ローレライ』らしき後ろ姿を大通りで見つけた。姿を視認して俺は安堵する。

このままだと俺は、シルヴィアと一生再会できない気がしたのだ。追いつけなかったら、俺の知らない遠くまで、シルヴィアが行ってしまう予感がした。

「お願いだ！ 待ってくれっ！ 俺はっ、俺はあっ！ シルヴィアに言っておきたいことがあるんだ!!」

大声で名前を呼んでいるのに、シルヴィアは振り返ってくれない。俺の声は聞こえているはずなのに、立ち止まらず、前へ前へと彼女は進み続ける。

「頼む！ 頼むから俺の話を聞いてくれ!!」

俺の声を無視するシルヴィアは、曲がり角の向こうへ消えてしまった。しかし、大丈夫だ。もう少しで追いつける。

「うあっ!!」

曲がり角の先に走り込んだ俺は、通行人にぶつかってしまった。弾き飛ばされた俺は、地面に尻もちをついた。

「すまないな。警備兵さん。ちょっと余所見をしていた。大丈夫かい？」

恰幅の良い白髪の男性が、俺に手を差し伸べてくれた。ぶつかったのは俺のほうだというのに、紳士な男性は文句の一つも言っていない。

俺は警備兵の革鎧を着たままであることを思い出して赤面する。警備兵でありながら、市民に迷惑をかけてしまった。その上、この無礼をまだ詫びていない。

「申し訳ない。こちらこそ不注意でした!」

男性は怪我はないかと心配してくれる。彼の厚意はありがたいが、それよりも俺はシルヴィアの行方が気になった。だが、シルヴィアの姿はどこにもない。

シルヴィアは曲がり角の先にいるはずなのに、煙のように消えていた。近くにいる人間は、俺がぶつかった白髪の男性だけ。

「あれ？ シルヴィアは……?!」

「ひよつとして……、警備兵さんは誰かを追っていたのかな？」

「女の子がこっちに来ませんでしたか？ その、えっと、胸の大きな金髪の女の子なんですけど……」

「いや。見ていないね。せひとも見てみたい子ではあるが、こっちに来たのなら私とすれ違っているはずだ。でも、私は誰ともすれ違っていない。警備兵さんとはぶつかったがね」

「そう……、ですか……。本当にすみません。見間違えたのかな。ははは……」

俺は力なく笑う。間抜けすぎる。

俺はありもしないシルヴィアの幻影でも追っていたのだろうか。あれが本当にシルヴィアの後ろ姿だったのなら、見失うはずがないというのに。

「ふむ。怪我もないようだ。それじゃ、私はもう行くよ。警備兵さん。私は都の治安を守っている警備兵を応援しているよ。今度は前をちゃんと向いておくようにね。何か辛いことがあっても、前を向いて歩くのは重要だぞ。お若い警備兵さん」

白髪シロカミの男性は、悪戯つ子のように笑っていた。俺は頭を軽く下げて、ぶつかってしまった無礼を重ねて詫びた。

それから俺は、シルヴィアを探して走り出した。見失ってしまったが、まだこの近くにいるはずだ。根気よく探せばきっと見つかるに違いない。俺は夜の王都を駆け回った。しかし、シルヴィアを見つけることはできなかった。

次の日も、その次の日も、彼女を探し続けたが、彼女はどこにもいなかった。



冥王は自分の姿を、自由自在に変化させることができた。創造主ソウルメイカーに与えられた権能の一つ、《変幻変貌メタモルフォーゼ》の力だ。

巨大な物や小さすぎる物、複雑な構造物に化けることはできない。しかし、外見や服装を変えることは容易だ。一度でも会ったことのある人間ならば、そっくりに化けることができる。

「あの警備兵の男、何だったんだろう……？」
ルキデイスは白髪シロカミの男性から、黒髪クロカミの青年の姿に変貌へんごうした。

「もしかすると、シルヴィアの口調で怪しまれた可能性があるな。彼女が職場でどんな風に振る舞っていたか俺は知らない。上司は気にしていなかったが、あの同僚とは親しげに話し合う関係だったのか……？」
ふむ、無視したのは不味かつたかもしれない」

《変幻変貌メタモルフォーゼ》で姿や形、声は模倣できる。しかし、精神まで真似することはできない。

この日、ルキデイスはシルヴィア・ローレライに化けて辞表を出してきた。これで彼女が失踪しても、警備兵が探し回ることはないだろう。仕事が嫌になって辞めてくれたと思ってくれば好都合だ。

ルキデイスはシルヴィアが所持していた警備兵の身分証で、彼女の所属支部を知った。そして書き込まれていた署名から、シルヴィアの筆跡を知ることができた。

本人の姿で、本人の署名がされた辞表を出してきたのだ。筆跡は精巧に真似ている。あの辞表はまず簡単に見破れない。当面はこれで大丈夫だ。しかし、万全ではない。

辞職があまりに急であるし、同僚に対して支部長の執務室がどこにあるかなど、奇妙な質問をしてしまった。

姿や声がシルヴィアそのものだったから露見しなかったが、質問をされた同僚は不自然さを感じ取っていたはずだ。職場や寮にある私物を全部処分してかまわないとも伝えてあるが、普通では考えられないことだ。

シルヴィアに家族であるとか、親しい人間がいると、これまたややこしいことになる。誰にも相談をせず仕事を辞めたとなれば、何があつたのかと心配される。

家の地下に軟禁しているシルヴィアから、家族構成や交流関係を聞き出す必要があつた。情報を聞き出したら、彼女の姿に化けて、自然な形で人間社会から『シルヴィア・ローレイ』の存在を抹消しなければならない。

娼婦であれば、失跡は不自然と思われぬ。しかし、昨日まで真面目に警備兵をしていた女性が消えれば、それは事件性があると推認されてしまう。

娼婦と違って、細心の注意を払わなければならない。何か一つでもミスがあれば、ルキデイス達のやっていることがばれてしまう。

「あの警備兵は、偽物のシルヴィアを怪しんでる感じじゃなかったニャ。あれは本当に、何か用があつただけのような気がする。にやつははははっ♪ デートのお誘いだつたら、寝取られちゃつて可哀想ニャー！」

ルキデイスを見守っていたユファは、全てを見ていた。

自衛手段の乏しい冥王を単独で活動させるのは、危険が大きい。なので、どんな時でも眷族が近くに控えている。

「あの警備兵がシルヴィアの恋人だつたら面倒だな。いきなり仕事を辞めた拳句、どこかに消えたとなつたら、絶対に騒ぐはずだ。必要があるなら、事故死か病死に見せかけて、あの警備兵は始末しなくては……」

ルキデイスとユファは家に急ぐ。家ではシェリオンが尋問の用意を整える手筈となつていた。



シルヴィアは、真つ白な部屋で目を覚ました。

その部屋は、正四角形の壁、床、天井で囲まれている不思議な場所だつた。奇妙なことに出入りをする扉が、この部屋にはなかつた。

明かりはシルヴィアの頭上にある円形の結晶灯だけ。たつた一つの照明が、真つ白な部屋を照らしていた。

「ここはどこ………?」

手足は動かなかつた。シルヴィアの両手両足は、革ベルトで椅子に固定されていた。

「なつ、何なの!? これっ!?」

シルヴィアが座らされている椅子は、普通の椅子ではな

かった。医師師の診断を受ける妊婦が、座る分娩台に似ていた。普通の分娩台と違うのは、座っている人間の四肢を拘束する器具が取り付けてあることだ。

手首は肘掛けに、足首は開脚台の足置きに固定されている。強制的に開脚させられているので、股を閉じることができなかった。革製の拘束具でしつかり固定されている。動かせるのは首だけだ。

「もう……っ！ ふざけないでよ。私なんて服を着てないの……？」

シルヴィアは服を脱がされていた。警備兵の制服どころか、下着すら着ていない。丸裸で拘束椅子に座らされていた。

胸は丸出しで、隠そうにも手は肘掛けから動かせない。抜け出そうと上半身をくねらせるが、乳が揺れるだけで拘束は緩まなかった。

陰部に至っては股を開いているので、前にさらけ出しているかのような状態だ。両足を拘束している開脚台は頑丈で、人間の脚力でどうにかなるようなものではなかった。

シルヴィアが座っている拘束椅子は、胸部と陰部を晒す構造になっていた。失禁してもいいように、尻の部分は便座のように切り取られていて、椅子の下からは尻穴すら観察することができた。

「本当に最悪。これが夢じゃなかったら、羞恥心で死にたくなるわ……」

シルヴィアが座っている拘束椅子は、素人が急造したもものではなさそうだった。悪い意味で完成度が高い。拷問官が使っているもおかしくない。シルヴィアは警備兵の研修で、これと似たようなものを博物館で見た気がした。

晒し者になっているのは最悪だ。だが、座り心地は見た目に反し、それほどきつくない。医療用の分娩台を改良したもののなかもしれない。改良とは言うものの、シルヴィアにとっては改悪だ。拷問用の椅子と違って、背もたれに鋭い棘があるとか、以前に座っていた人間の血が付着していたりしないのが救いではある。

「これって、本当にどういう状況……？ なんで私、こんな目に遭つてるわけ……？」

シルヴィアは気を失う前のことを思い出そうとする。

（えーと。私は連続失踪事件を調査していて……、ペタロ地区で聞き込みをした。そこまではちゃんと覚えてるわ。それで……、確かルキデイスって人が住んでる家を訪ねて、それから……、それから……？）

シルヴィアは、目線を下げて腹部を見る。こうすると晒されている自分の陰部を見ることになるので嫌になる。だが、腹部に強烈な一撃をくらって気絶したのを思い出した。

「この匂いは香水……？ いや、違う。この匂いはもしかして消毒液……？」

自分の身体と拘束椅子から、アルコール消毒液の匂いがした。聞き込みで一日中歩いたというのに、シルヴィアの肉体からは汗の臭いがしない。誰かが身体を綺麗に洗浄してくれたようだ。

「支部長の忠告、もつとちゃんと聞いておくべきだったかも……」

こんな拘束椅子がまともな用途に使われるはずがない。ここが医療院の病室ということは絶対にありえない。

この部屋には窓どころか扉すらない。夢の中の世界と言われたほうが納得できる場所であるし、自分の置かれている状況から考えても夢であつてほしかった。しかし、現実感がある。夢ではなさそうだった。

「おはようございます。シルヴィア」

前方の白い壁が歪み、向こう側から見覚えのあるメイドがやってきた。

「シェリオンさん……？」

牛角が生えた獣人のメイドは軽く会釈をしてくれた。氣を失った時の情景がフラッシュバックした。シルヴィアは、このメイドに正拳を叩き込まれて、失神させられたのだ。

「申し訳ありませんが、少々お待ちください。ご主人様は

準備を終えたら、こちらにいらつしゃいます」

拘束椅子に横付けされた台車には、薬瓶や注射器などが置かれている。拘束椅子の上で動けないシルヴィアにとっては、精神的によくはない器具が多数見受けられた。

「これはどういうことなんですか?! どうして、こんなことをしているんですか!」

「名誉なことですよ。シルヴィアはとても幸運です。ご主人様選ばれたのですから。選ばれた後は、貴方の資質次第です。どちら側になったとしても、ご主人様のお役に立つてください」

シェリオンからは、要領を得ない意味不明な答えが返ってきた。しかし、はぐらかしている感じはしない。

「私が選ばれた……? ちゃんと説明して! 貴方は私に何をする気なの!」

ちょうどその時、シェリオンが入ってきた白い壁の向こうから、ルキデイスとユファがやってきた。壁の一部がすり抜けられるようになっていて、そこを通過して出入りしているようだ。

「シルヴィア・ローレイ。元氣そうでよかった。レイピアに手を伸ばしたのは、不味かったな。下手をすればシェリオンに殺されていた。ああ、そうだ。その椅子での寝心地はどうだった? 人体構造上、快適に過ごせるように設

計してあるが、個人差があるらしい。今までに座った女から、感想を聞いているが評判はあまりよろしくない」

ルキデイスは邪悪な笑顔で、シルヴィアに語りかける。家で応対していた時と同じ好青年の姿であるが、口調からは邪心が漏れ出していた。

シルヴィアは全てを理解した。眼前にいるルキデイスこそ、娼婦を行方不明にしていた犯人であり、シェリオンとユファはこの悪漢の手先だと。

「最悪に決まっているじゃない！ このド変態!!」

「にやつははははっ！ 格好は君のほうが変わ態ニヤ！ 自分がどんな格好をしているか、鏡で見せてあげたいニヤ!!」ユファは笑い転げている。それも無理からぬことだ。シルヴィアは隠すべき場所を異性のルキデイスに晒しているのだ。ルキデイスの位置からは膣穴を含めて全てが丸見えになっていた。この格好で悪態をついても滑稽であった。

「シルヴィアは気絶して、ずっと眠っていた。眠っている間に衣類はこちらで処分しておいた。悪いが返すことはできない。しばらくはその格好で我慢してくれ」

「……ふん！ 好きなようにすればいいわ。でも、私に手を出したのは失敗だったわ。私がいなくなれば、貴方は絶対に疑われる。警備兵団は貴方達を捕まえるわ！」

「心配は無用だ。シルヴィアの代わりに警備兵の装備一式

は返却しておいた。ついでに辞表も出しておいたぞ。支部長から色々と言われたが、最後は辞表を受け取ってくれた。辞めようとする部下を、引き止めようとするよい上官だったぞ。貴様の仕事ぶりが評価されていたというのもあるかもしれないな」

「へえ……。貴方、嘘が上手いのね」

「失礼な女だ。俺はちゃんと『ブライアン上級警備兵』に会ってきた。俺は嘘を言っていない。虚勢を張るのはかまわないが、虚しくなるだけだぞ」

シルヴィアは動揺を隠そうと、沈黙してしまった。『ブライアン上級警備兵』というのは、シルヴィアの上官である。ルキデイスが知っているはずのない名前が出てきたことで、シルヴィアの精神は揺さぶられた。

「誰も貴様を探しに來ない。そもそも警備兵如きでは見つけることができない場所だ。この部屋は家の地下にある。地下室を異空間化させて、作り出した次元領域だ。分かりやすい言葉で説明すると、ここは『迷宮』だ。通常の方法で、この部屋に入ることにはできない。逆も同じだ。俺の許可なく、ここから出ることはできない」

「何が目的でこんなことをしているの？」

「質問するのは俺だ。そして、答えるのは貴様だ。まずは、警備兵団がどこまで掴んでいるのかだ。大したことは分か

っていないのだろうが、捜査される側としては気になって夜も眠れない。娼婦が十四人消えたことはもう把握しているようだな。行方不明者の捜査はどこまで進んでいる？ 捜査している警備兵は、本当に貴様だけなのか？ 教えてくれ、シルヴィア」

シルヴィアは顔を横に背ける。

「馬鹿馬鹿しい。そんなの教えるはずがないでしょ。貴方みたいな犯罪者は絶対に捕まるわ」

「素直に喋ってくれるとは、思っていないさ」
ルキデイスは、シエリオンが運んできた台車の上に乗っている器具を手取る。得体の知れない薬液を調べて、何かをするつもりようだ。

「こんな男の玩具になるくらいなら、死んだほうがまし……！」

自力で脱出することは不可能だ。この先、シルヴィアに明るい未来は訪れないだろう。

それなら舌を噛み千切って死んでしまったほうがいい。どうせ殺されるのなら、自分で自分を殺すことをシルヴィアは選んだ。シルヴィアは前歯で舌を挟むが、力を入れられなかった。

「……………？」

恐怖心で躊躇ちゅうちゆしているわけではない。本気で噛もうとし

ているのに、なぜか力が出ない。噛み切るどころか、舌を甘噛あまがみしている。混乱しているシルヴィアを指差して、ユファは再び大笑いしている。

「自殺しようとしたって無駄ニヤ。その拘束椅子には、座っている人間の自傷行為を防止する呪いが施されているニヤ。舌を噛み切ろうなんて思わないほうがいいニヤ。間抜けな面を晒すだけニヤ。にやつはははは！」

「悪趣味が極まってるわね……。いいわ。何でもすればいいじゃない。それでどんな拷問をしてくれるわけ？ 指の爪を全部剥がすの？ 歯を一本ずつ抜いていくとか？ それとも眼球を熱した針で突き刺すのかしら？ こんな椅子を用意しているくらいだから、さぞかしすごい拷問で私を甚いたぶ振るんでしようね」

「それは期待ではなく皮肉なんだろうが……、拷問官がやるようなことはしないぞ……？ 俺は猟奇殺人犯というわけじゃない。必要ならそういう残酷なこともするが、必要でないなら相手を苦しませるようなことはしない。人間を斃なぶ殺す行為に、俺は価値を見出してない。そういう趣味を持つ者もいるにはいるが……、シルヴィアはそういうことをされたいのか？」

「まともな返答ね。ちよつと意外だったわ」

ルキデイスの返答がまともすぎたので、シルヴィアは自

分のほうが恥ずかしくなってしまうた。

「サピナ小王国の話を貴様に聞かせただろう。俺はあの国を牛耳っていた王族や貴族よりは、まともな奴だ。人間の中には、魔物よりも魔物にふさわしい心を持っている奴がいる。どうして、あんななってしまうんだろうな。自分の同胞を拷問して楽しいものか？ ああいう人間は、まともな奴だ。理解に苦しむ」

「じゃあ、狂ってない貴方は、私にこれから何をしてくれるのかしら？」

「期待外れで悪いが、自白剤を投与するだけだ。投与する時に少し痛いかもしれないが、薬の効果で苦しむことはない」と保証する。興奮してお喋りになる薬だ。ちよつとした副作用はあるがな」

ルキデイスは先端に細いチューブが付いた大きな注射器を、シェリオンに手渡した。注射器は半透明で、中に濃い青色の薬液が詰められていた。

「シルヴィア。力を抜いてください」

大きな注射器を持ったシェリオンは、看護師のようだった。シルヴィアは観念して、腕の力を緩めた。自白剤の効力がどれほどのものかは分からない。だが、絶対に喋ってやらないという気構えを固めた。

「力を抜くのは腕じゃなくて、お尻のほうニヤ。シェリオ

ンの持つてる注射器をよく見るニヤ。針が付いてない浣腸用の注射器ニヤ。その注射器で腕の血管を刺すなんてできないニヤ」

「ええっ？ かつ、浣腸……!?!」

ユファが言った通りであった。シェリオンの持つてる注射器には針が付いていない。注射器の先端に付いているのは、半透明の細いゴムチューブだ。

「嘘でしょ。お尻から入れるの……？ 口とかじゃ駄目……?」

「口から入れたら効き目が薄い。普通の人間なら自白剤を飲まされたら吐き出そうとするだろ？ 血管から入れた場合は効き目が強く出すぎる。それに拒絶反応が起こった時が大変だ。血管に入った薬剤を取り出す方法がない。その点、浣腸は便利だ。効きやすく、いざという時は腸を洗浄してしまえばいい。肛門から入れるのが適切だ。悪意はないぞ。自白剤を入れる時は、誰が相手でもそうしてきた」

注入するのが同性であるシェリオンというのは、ある種の配慮なのかもしれない。シルヴィアの肛門に、注射器の先端が添えられた。

抵抗したところで、無理やり入れられるだけだ。それから助言通り力を抜いて、浣腸を受け入れたほうが賢明である。しかし、得体の知れない薬液を、腸内に注入されるの

は不安でならない。

「……………っ!？」

肛門の括約筋が押し広げられ、注射器のチューブが腸内に入り込んだ。チューブには潤滑性の薬が塗られているので、肛門を潜ってしまえば抵抗なく挿し込めた。

「うっ! ああっ! んっあああっ!!」

青い薬液がシルヴィアの直腸を満たしていく。この自白剤の素晴らしい点は、自白している最中の記憶が吹っ飛んでしまうことだ。

投与された人間は、自分が何を喋ったのか覚えていない。質問には従順に答えてくれることが多いが、多くの薬と同様に個人差がある。

特別な訓練を受けた人間だと質問に答えられないことがあるが、シルヴィアは一般の警備兵でしかなく、自白剤に対する抗体を持っていない。薬剤に耐える訓練だって受けていなかった。一般の警備兵が、自白剤に耐えられるはずがないのだ。

こればかりは気力であるとか、気構えでどうにかできる代物ではない。

「まず年齢から聞くとしようか。シルヴィア・ローレライ。貴様は今年でいくつになる?」

「……………」

「じゅ、じゅうはちい」

潤んだ瞳でシルヴィアは答えた。シルヴィアの意識は夢と現実の狭間で、混濁している。直腸を満たした薬液の恍惚が、シルヴィアの理性を排除してしまった。

「よし。いい子だ。シルヴィア。次の質問だ。家族はいるか?」

ルキデイスはゆっくりと質問していく。

質問をしている最中、シェリオンとユファは尋問の補助を行っていた。自白剤の効果で意識が混濁しているシルヴィアは、副作用に襲われていた。

シルヴィアの口からは唾液が垂れ流れ、両目からは涙が溢れ出し、頬を伝って流れ落ちていく。自白剤の副作用とは、体液の異常分泌であった。

唾液や涙だけなら拭いてしまえばいいが、下半身から漏れてくるものはそれだけでは対処できない。

「ひゃうあう……………っ!？」

「シルヴィアが痛そうな顔をしているぞ?」

「尿道に管を突っ込まれれば、多少の痛みはあるニャ。でもこうしないと、尿が飛び散るから後片付けが大変なニャ。我慢してほしいのニャ」

ユファはシルヴィアの尿道に管を差し込み、措置を完了させた。最後に、膣から体液が大量に出るので、床を汚さないように鉄製の容器を設置する。膣液だけでなく、肛門

から汚物が溢れ出たとしても、これで対応できる。加えて、シルヴィアが脱水症状に陥らないように、食塩水を飲ませて、水分を補給させる必要があった。

体中から、あらゆる体液を垂れ流すシルヴィアは、秘密をも漏らし続けた。年齢から家族構成、警備兵団での仕事や職場の環境、聞き込みで得た情報、あらゆる情報を素直に答えていった。

「最後になったが、シルヴィアはジャンという警備兵とどういう関係だ？」

「じゃんう？」

「支部にいる同僚の警備兵だ。シルヴィアと年齢は同じくらい。話したことくらいあるだろう？」

「んああああ……。ああああつ、あのひいとお、よくしらなあいい。わたしいのことお、みてえるだけええ……。いづもお、かおおが真つ赤あええ……。ああああ……。んあつ！」

「よく知らない……。か。それなら問題はない。さてと、次の質問も素直に答えろ」

ルキデイスは、自白剤を投与したシルヴィアから、知りたい情報を全て聞き出した。尋問の結果、喜ばしい事実が二つ判明した。

憲兵団と警備兵団は、娼婦失踪を重大な事件とは考えて

いないこと。もう一つはシルヴィア・ローレライが孤児の生まれで、家族や恋人など親しい人間がいなかったことだ。「くつくくくく。都合が良すぎるな。これも冥王の悪運かな？」

捜査機関は、娼婦の連続失踪を重大事件と考えていない。それなら、これ以上娼婦が消えなければ、事件として捜査されることはないはずだ。

シルヴィアは孤児であった。幼い頃に流行り病で両親を亡くしており、家族や親類はいない。育ての親だった孤児院の修道女は、一年前に死んでいるので気にする必要はなさそうだ。意外なことに恋人はいなかった。シルヴィアという女は、仕事一筋な生き方をしているようだ。娼婦の行方を追っていたのは、目覚ましい成果を上げて騎士の称号を得たいという彼女の野心が影響していたらしい。実際、着眼点は悪くなかった。

憲兵や警備兵が捜査をしたとしても、ルキデイスの家には辿り着けないように情報をばら撒いていた。けれども、シルヴィアは探し当てた。警備兵としての資質、騎士になるという強い執念、そして運が味方して、シルヴィア・ローレライはルキデイスの家を探し当てた。

ルキデイスの家まで辿り着いたシルヴィアの捜査能力は優秀だ。しかし、功を焦るあまり一人で突っ込んでしまっ

た。

「僕達に辿り着いたのはすごいけど、こういう結果で終わったらお間抜けニヤ」

「ユファ、小馬鹿にするのはやめなさい。眷族になるかもしれない人間です。ひよっとしたら、長い付き合いになるかもしれません」

「んニヤ。シルヴィアも巨乳だもんね。そういう可能性もありえるニヤ」

シルヴィアの間違いはたった一つだ。単独で動いたことにそれに尽きる。

シルヴィアが上司や同僚に報告をしていれば、ルキデイスは手を出すのをためらっただろう。さらに言えば、複数人で捜査していれば、このような状況に陥ることは絶対になかった。敗因は手柄を独り占めしたいという野心のせいだ。騎士になりたかったシルヴィアは、誰よりも成果を求めていた。その食欲さが破滅を招いた。

「家族なし、親しい親類なし、恋人なし。これなら何もせずとも大丈夫だな。友人関係は職場の同僚に限定されている。いなくなっても騒ぐ人間はいないはずだ。しかし、アマンダ・ヘイリーは不味かったな。入れ込んでいる常客が、憲兵に捜索願を出しているとは……」

「その常客を殺してきましようか？」

シエリオンの提案を、ルキデイスは却下する。

「いいや。放っておこう。憲兵団は本気で動いていない。数ヶ月すればその男は別の娼婦を追いかけるようになる。余計なことはせず様子見だ。娼婦を買うのに使っていた仲買人は口が固い。金さえ払っていけば割り切ってくれる奴だ。しかし、今後はどう動くか分からないな。使い続ければ危険が増大する。娼婦を使うのは打ち止めだ。結局、苗床を十四匹作っただけだったな。シルヴィアは十五匹目にならないといいが……、さてどうなるか」

尋問を終えて、疲労困憊しているシルヴィアの頬を、ルキデイスは優しく撫でた。



尋問を終えたシルヴィアは、黒い部屋に運び込まれていた。身体の汚れは拭われ、清められている。

黒い部屋には、大きなベッドが置いてあり、シルヴィアは仰向けで寝かされていた。体液の異常分泌は収束しつつあるが、自白剤は抜けきっていない。まだ腫が潤んでいるし、膣からは愛液が滴っていた。

この黒い部屋は、白い部屋と同様に地下室の異空間に存在する。白い部屋は尋問を行う部屋だ。そして今いる黒い

部屋は、重要な儀式を行う部屋であった。

「娼婦とは匂いが違う。とても純粋で、綺麗な匂いがする。」
冥王と交わった人間は、瘴氣と魔素によって汚染される。転生して眷族となるか、繁殖母体となって死ぬまで子を産み続ける苗床となるかは、シルヴィアが適性を持つかどうかで決まる。

こればかりはやってみなければ、分かりようがない。眷族となってくれば、人間を辞めて強力な魔物へと変異する。冥王の従順な下僕として、冥王の子を産み、そして冥王を守る最強の守護者となってくれる。しかし、眷族化したのは、今のところ四人のみ。資質を持つ者は希少だ。

「この子、おっぱいが大きいニャ。シエリオンや僕よりは小さいけど、サロメくらいはあるっばい。警備兵の革鎧を着ている時は目立たなかったけど、これは立派な巨乳なのニャ！」

ユファは、シルヴィアの乳首を指先でツンツンと弄^じつて遊んでいる。

「巨乳説はないと思うんだがな……」

「にやらば！ 僕は冥王陛下に、新たな説を提唱するニャ。ずばりっ！ 巨乳処女説ニャ！」

「ご主人様。ユファが邪魔なら摘まみ出しましょうか？」
「気にしていない。それで、予想はしていたが、巨乳で処

女なら眷族になると、ユファは言いたいのか？」

「その通りニャ！ 今まで眷族になった四人は、巨乳以外に共通点があったニャ。それは、四人とも処女だったことニャ!!」

「それは……、あるのか？」

「あるニャ！ 処女信仰って言葉があるくらい処女は特別ニャ!!」

「処女であることが条件だとすると優秀な雌を眷族化するのが難しくなる。できれば、俺としてはそうあってほしくないぞ……」

冥王としては、処女に特別の拘りがない。というより、条件なんてないほうがよかった。

今までに作った四人の眷族は、冥王を遥かに上回る最上級の魔物へと化けている。

シエリオンは奴隷メイドで、ユファは踊り子でしかなかった。しかし、眷族化した後は一流の騎士を瞬殺できる凶悪な魔物となった。

もし無条件で、眷族を作ることができれば、冥王は最強の軍団を作れていただろう。乙女であることが条件だとしたら、それは凄まじく厄介な条件だ。ユファの言う巨乳処女説が事実だとすれば、苦勞して捕獲した女が、処女でなければ眷族にできないことになってしまう。

「今までも処女で試したことはあつたんだ。仮にシルヴィアが眷族化したとしても、処女が条件だとは確定しない」
サピナ小王国でルキデイスは、百人の貴族を使って眷族を作ろうとしたことがあつた。

革命で処刑するはずだった貴族の妻や娘、愛人などから見込みがありそうな百人を選抜して種付けしたが、全員が苗床化してしまつた。その中にはもちろん処女も含まれていた。下級血族を産む繁殖母体となつてくれたが、誰も眷族化しなかつたのだ。無駄ではなかつたが、冥王にとつては残念な結果だつた。

「それじゃ、気付け葉でシルヴィアの意識を呼び戻すニャルキデイスのチンポは臨戦状態になつてるニャ？」

ルキデイスは自らの生殖器を勃起させる。雌に種付けするのが冥王の権能だ。目の前に雌がいるのなら、いついかなる時でも生殖することができる。

「よろしければ、私の口で下準備をいたしませんか？」

シェリオンの口調は提案というより、ねだつていた。自らの誇る巨乳をルキデイスに押し付けて、媚びてくる。

「準備じゃなくなる可能性が高い。今回は我慢しろ」

露骨に残念そうな顔を作りつつも、シェリオンは引き下がらなかつた。

冥王の種付けは、眷族にとつてこの上ないご褒美だ。主

への奉仕であると同時に、己の欲望を満たすことができる。眷族の欲望は、冥王に奉仕することと、子を産むことを除けば、人を殺すことぐらいいしかなかつた。ラドフィリア王国にいる間は自由に人を殺せないの、冥王の肉棒を求めてしまいがちだ。

シェリオンは断られてしまつたが、不満はけして口にしていない。本国で留守番をしている三番目の眷族サロメや四番目の眷族エリカに比べれば、シェリオンとユファは恵まれている。

冥王の寵愛を受けられないサロメとエリカは、人間を殺して苦痛を紛らわせているはずだ。同伴を許されたシェリオンが不満を口にしたら、あの二人にどれほど恨まれることだろう。

「シルヴィアはどんな声で、啼ないてくれるのかな」

シルヴィアの意識は、苦々しい刺激臭によつて無理やり叩き起こされた。

直腸に投与された自白剤のせいで、尋問中の記憶は欠けていた。自分が何を喋つてしまつたのか、ちつとも覚えていない。言つてはいけないことを言つてしまつた気もするし、何も喋っていないような気もした。実際には全てのことを暴露してしまつているが、シルヴィアには分かりやうがない。

シルヴィアは忌まわしい拘束椅子から解放され、ベッドの上で仰向けになっている。自由の身となったが、その代わり特殊な首輪を着けられていた。

この首輪は、攻撃抑制の拘束具である。暴れたり、逃げようとすると、筋肉が弛緩してへたり込んでしまうようになっている。

「お昼寝の時間は終わりニヤ」

ユファは部屋の四隅に置いてある香炉に火を入れていった。黒陶製の香炉から、芳しい淫香が漂い出て、室内を満たしていく。

「あうん……っ！」

何をされるかは、予想がついていた。服を脱がされた無防備な女がベッドに寝かされている。

そして服を脱いだ男が、勃起した陰茎を露わにしていた。性的なことに疎いシルヴィアだって、それくらいの知識があった。やることは一つしかない。

「犯す側の責任として、説明はしておいてやろう」

「犯罪者にしては紳士的なのね。まったく嬉しくないけれど……」

「その割には、顔が真っ赤ニヤ。まんざらでもなさそうな顔してるニヤ」

「ユファ。もう茶化すのはやめなさい。シルヴィアにとつ

て大切な儀式なのですから。これ以上続けるのなら、本当に摘まみ出しますよ」

シェリオンとユファは、助けてくれる気はなさそうだがルキデイスに処女を捧げるのは不可避だ。覚悟を決めざるを得ない状況だった。

陵辱されるのなら、相手に対して嫌悪感が沸き起こるはずだ。けれども、シルヴィアの心は強い拒絶感を抱えていなかった。悔しいことに、ユファの言ったことは、的を正確に射ていたのだ。

自白剤の副作用だけではない。ユファが焚いた淫香の影響もあるだろう。けれど、一番の要因はそれらではない。犯してくる相手の容姿だ。ルキデイスの容姿は美しい。賢そうな顔立ちをした黒髪の美青年だ。色恋沙汰を避けてきた仕事女の心をも動かす外見を持つ。黄金色の瞳は魅力的で、最初に家を訪れた時も、つい見惚れてしまった。

警戒心を抱いていたのに、不用意に家にながり込んでしまったのも、ルキデイスの容姿に魅了されたせいだ。

「まずは正体を明かしておこうか。こういう種明かしは嫌いじゃない。ちよつとしたサーピスだ」

顔に手をかざすとルキデイスの容姿は、一瞬で黒狼に変貌した。

シルヴィアは、己の目を疑う。薬の影響で幻覚を見てし

まったのではないか。シルヴィアはそう思ってしまった。しかし、そうではない。

「言葉すら出ないか？面白いものだろう。百面相なんてものじゃないぞ」

ルキデイスはどんどん顔を変貌させていく。狼の獣顔から、次はシルヴィアの顔になった。鏡越しに会っている自分とそっくりの顔だった。その次は上司のブライアン上級警備兵、その次は同僚の顔になる。顔や姿だけでなく、服装まで変えてみせた。身体どころか、服装まで瞬時に作り上げてしまう。

「どうということ……？」

娼婦連続失踪事件で、情報が出てこなかった理由。それは犯人が、自由自在に姿を変えていたからだ。ある時は老人に成りすまし、ある時は少女となって、犯行に及んだ。

行方不明になった娼婦の姿に化けて、街をうろつけば、行方不明になった日にちを誤魔化すこともできた。

「これが俺の能力（メタモルフォーゼ変幻変貌）だ。俺は自由自在に姿形を変化させることができる魔物だ。シルヴィアは俺を犯罪者と言ったが、俺は罪人じゃないぞ。人ではないから。魔物には人権がないから、裁判を受ける必要がない。そもそも魔物は、人間が決めた法律や道徳を守る義務がない」

「魔物……!? そんなはずがないわ！魔物が人間の街で

暮らしているなんてありえない!!」

ありえないことであるし、断じてあってはならないことだ。

「俺は冥王だ。魔物の頂点に君臨する絶対支配者。人間の都に入り込むくらい簡単だ。人間に化けるのは、俺の得意技なんぞな」

得意気に言っているが、実のところ冥王にはそれしかできなかつたりする。ユファが突つ込みをいれようとしたが、寸前のところでシェリオンが口を塞ぎ、事なきを得た。

かつて存在していた魔王であれば、人間の都に堂々と乗り込んで侵略することができた。魔王は最強の魔物だった。勇者にこそ勝てなかつたが、普通の人間を蹂躪することは容易だった。けれど、冥王は魔王と違って最弱の魔物だ。魔王のように大国と単独で戦おうものなら、瞬殺されてしまうだろう。

「シルヴィアは、今の今まで俺達の正体に気付かなかつた。この世には、知能のない魔物しかいないとでも思ったのか？残念ながら、この世には俺のような魔物が存在している。先入観というのは恐ろしいな。今日でそんなものは捨ててしまふべきだ。魔物であっても、高度な知能と擬態能力があれば、俺のように人間社会に溶け込める」

正体を明かした冥王ルキデイスは、青年の姿に戻ってシ

ルヴィアに語りかける。

「シルヴィアにやってほしいことは、簡単なことだ……。冥王の子を孕んで産む。子産みは創造主が雌に与えた特権だ。優秀な雌の胎からは、優秀な子が産まれる。シルヴィアの胎は、強い魔物を産み落としてくれそうだ」

ルキデイスは、シルヴィアの乳房を掴む。

「そういう目的で娼婦を拉致していたのね……」

「全員期待外れだったが……。いや、この言い方は彼女達に失礼か。娼婦達は立派な苗床になってくれた。シェリオンやユファのように眷族化しなかったが、役には立っている」

シルヴィアは、ルキデイスの頬を叩こうと手を振り上げたが、振り下ろすことができない。首輪の呪力が、シルヴィアの行為を抑制しているせいだ。魔物はシルヴィアの抵抗を気にせずに、生娘の身体を優しい手つきで撫でている。「警備兵だけあって腹筋が硬いな。引き締まっているのは鍛錬を続けている証拠だ。だが、胸と尻は雌らしく柔らかみがある。娼婦のような肉欲を受け入れ続けていた身体だつて悪くないが……。シルヴィアのような無垢な身体というのも、これはこれでいいものだ。怖い顔をしてくれるな。口下手かもしれないが、俺なりに賛辞を送っているつもりだ。魔物の王から褒められているんだぞ。少しは喜んでほ

しいな」

「魔物なんか褒められたって、ちつとも嬉しくないわ……!!」

「そうかそうか。言葉で足りないというのなら、身体を使って喜ばしてやろう」

シルヴィアは、ルキデイスに押し倒される。股を押し開けられ、お互いの身体が重なり、脚が絡み合う。シルヴィアは太腿で、脈打つ陰茎の熱を感じ取る。ルキデイスの男性器は、人間のモノより遥かに大きく膨張していた。

冥王は肉体の形状を自由自在に変えられる。その気になれば馬並みの凶悪な陰茎で、シルヴィアの処女膜を貫くことだってできた。しかし、下手をするとシルヴィアの膣口が裂けてしまうので、そんなことはしない。出産経験どころか、性経験すらない生娘だ。

無茶なことをする気はない。魔物であるが、ルキデイスは抵抗できない人間を虜つて、愉しむような性格ではなかった。

亀頭がシルヴィアの膣口に接触する。シルヴィアの股座からは愛液が漏れ出し、処女だというのに、今にも雄の肉棒を飲み込もうとヒクついていた。

「眷族に転生するか、自我を失って苗床になるかは、シルヴィア次第だ。人間を辞める覚悟はできたか？」

魔物の王は、返事を待たなかった。

巨大な魔物の陰莖が、シルヴィアの膣に挿入される。ゆつくりと押し広げていき、亀頭が処女膜を破り捨てた。

「ちよつと、まっ——いやっ!!」

シルヴィアの身体を掴みながら腰を下ろし、最奥まで亀頭を到達させる。一気に挿入されたシルヴィアは、鋭い痛みで身を強張らせた。

破瓜の痛みは女にとつて特別なものだ。愛を育んだ異性に、純潔を捧げたのであれば我慢できよう。だが、シルヴィアは昨日会ったばかりの魔物に捧げてしまった。

意中の相手がいるわけではなかったが、言い表せない喪失感があった。深々と根本まで突き刺さったルキデイスの陰莖が、膣内で蠢いているのをシルヴィアは感じ取る。

「ああああっ! んああああああああっ!!」

ルキデイスは〈変幻変貌〉で、シルヴィアの膣を調べていた。男性器の形状を変化させることで、犯している雌に極上の快楽を与える。初体験の生娘では耐えきれないであろう増大させた快楽で、精神を陥落させる。

苗床化して人格が死ぬ可能性は大きいのだ。ならば、苦痛と恐怖の中で死なせるよりは、悦楽に溺れながら死なせるほうが情け深い。犠牲になった娼婦達は極上の愉悅に包まれて、苗床に墮とされていた。

「ああっあ! んあつああ!」

陰莖が出し入れされる度に、シルヴィアは美声を上げる。肉棒を咥えている膣穴から、破瓜の血液と滲み出た愛液が漏れて、ベッドシートが汚れる。シルヴィアの意識が拒否しても、彼女の身体は性的快感を喜んで受け入れ、貪りつづけた。

(嘘でしょ……っ?! もう処女膜を破られた痛みが消えてゆううう……っ?!)

シルヴィアはルキデイスの身体を押し退け、逃れようとする。だが、抵抗する両手には、力が入らなかつた。その間もルキデイスは腰を動かして、シルヴィアの女陰を蹂躪し続けた。亀頭で子宮を突き上げられた途端、シルヴィアの抵抗力は弱まる。

ルキデイスを押し退けようとする両手を、彼の背中に回して抱きついたら、どれだけの快楽が得られるのだろうか。シルヴィアは悪しき淫欲に飲み込まれそうになつた。だが、シルヴィアは微かに残つた理性で、踏み止まる。

「身体の相性は悪くない。こつちの動きに合わせてくれれば、もつと気持ちよくなれるというのに、強情な雌だ!」

黄金色の瞳が怪しく光つた。邪悪な魔獣は、シルヴィアが墮ちかけているのを感じ取っていた。

「なつ、何よ! こんなのお……っ。思つたよりも普通じ

やないいつ……！　こんなのでえ、私がどうにかなるとでも思ったのかしら……？　こんなことされたって、きつ、気持ちよくなんて、ならないんだからあ……、んああつ、いひやつ……！　なあ、あああ、んあつ！　な、あにこれえっ♡」

冥王の両目には、相手の感情を操作する能力が備わっている。冥王が持つ数少ない権能、瞳術〈誘惑の瞳〉の力だ。互いの視線が重なった時、その人間の感情を操って、好意を向けさせたり、反対に憎悪を向けさせたりすることができる。冥王の思うがままに感情を動かせるのだ。

瞳術は強力な能力だ。しかし、完璧ではない。耐性の高い人間を相手に発動すると、効果を弾かれることがある。しかし、冥王の〈誘惑の瞳〉は、性交している相手に対しては、絶対に成功するようになっていた。

たとえ清らかな聖女であっても、冥王と交わっている最中ならば、瞳術で清廉な精神を貶め、淫女に墮落させることができる。

〈誘惑の瞳〉は有用な能力である。だが、やはり本音で言えば、幻覚を見せて相手を自由自在に操るだとか、呪んだ相手を呪殺するような瞳術が欲しかった。冥王に与えられた権能は、人間の雌を惚れさせることに特化している。〈変幻変貌〉や〈誘惑の瞳〉は、戦闘では役に立たない。

けれども、ベッド上での戦いなら反則級の武器となる。〈変幻変貌〉で相手が望む姿に化け、〈誘惑の瞳〉で相手の心を墮落させる。完璧かつ最強の合わせ技であった。

（んいひうう！　セックスってこんなに気持ちいいものだったのおお……っ?!　無理やり犯されてるのに、気持ちよすぎて脳が溶けちゃううう……!!　チンポが出たり入ったりしてるだけなのに、子宮がキュンキュンするううう!!）

喘ぎ声が漏れないように歯を食い縛る。しかし、シルヴィアの身体は正直になりたがっていた。ルキディアの上下運動に合わせて、腰を動かしてしまつた。抵抗しようと暴れていた両足は大きく開かれて、ルキディアの下半身を歓迎する。

反応の機微で、シルヴィアの変化を感じ取つたルキディアは、舌を使って固く閉じた唇をこじ開ける。入り込んだ舌が、シルヴィアの口内を舐め回した。魔素を含んだ甘美な唾液が、シルヴィアの意地を崩壊させた。キスを終えた後、唇を結んで、沈黙を貫くことはできなかった。

「いやああ、あつ！　ああつ♡　来ちゃうううう！　何か、来ちゃうううう!!　ひいひいぐぐ！　いいつ、ちゃあう!!　いぐつ♡　ひぐうううううう!!」

シルヴィアは臆面もなく吼える。快楽が絶頂に達し、人間の矜持を捨て去って、雌のような嬌声で叫んだ。もはや

品性なんて存在しない。我が身を抱いている魔物が、愛おしすぎて狂いそうだった。

ルキデイスとシルヴィアの激しい情交に、シェリオンとユファは聞き惚れていた。それはまるで演奏を聞いているかのようだ。冥王から溢れ出す瘴気は、眷族に快楽を与えてくれる。シルヴィアの声を聞きながら、冥王の瘴気を全身で感じ取っているのだ。できることなら、今すぐベッドに飛び込んで、冥王の寵愛を賜りたい。しかし、眷族化は特別な儀式なのだ。シルヴィアは命を賭して冥王の愛を受け入れようとしている。そんな雌を軽んじることは許されない。だから、シェリオンとユファは冥王と雌の情事を静かに見守っていた。

冥王はハーレムを築くことを前提とした魔物だ。独占欲が皆無ではないが、普通の人間よりは嫉妬心が抑制されている。眷族も同様。そうでなければ、眷族同士で争いが始まって、ハーレムが崩壊してしまう。

「んあはああんっ♥いいいっ、んいいい♥ 私の膣中でえ、チンポおが、ふくらんでうゆううう♥」

挿入された男性器は、膣壁の圧迫に反発し、徐々に膨れつつあった。巨大な陰茎を包み込んでいる膣穴は、暴発寸前の肉棒を締め上げる。

「ああうっ♥ いぐういうううっ、あひいんんんんひ

いあああああーっ♥」

濃厚な精が勢いよくシルヴィアの膣中に注ぎ入れられた。ルキデイスの射精と同時にシルヴィアの背が反り返り、快感で身を震わせていた。

冥王の射精を受け入れた雌が感じ得る喜びは、人間の感覚限界を超えている。人間性を残したままでは得られない禁忌の味。冥王の精子が子宮を満たした時、人間の女から魔物の雌へと墮ちる。

種付けの洗礼を終えたシルヴィアは、戻れぬ領域に足を踏み入れた。

子宮内に入り込んだ子種は、シルヴィアの身体を魔物の肉体へと変化させる。まずは子宮の構造が大きく変化して、多産に耐えられる丈夫な胎となる。

（おっ、お腹が熱い！ 子宮に溶けた鉄が入ってるみたい
に熱いっ……!!!）

シルヴィアの子宮は、魔素で穢されていく。身体が変貌しつつあるというのに、不思議と恐怖心は感じなかった。

「魔素の汚染は順調に進んでいるな。子宮が熱を帯びていないのは、魂魄が自壊していない証拠だ。見込みのない雌だと、最初の射精で苗床化の兆候が現れる。だが、シルヴィアにはその兆候がない。濁りが一切現れないのは有望

だ。これは期待できそうだ」

冥王は種付けを施したシルヴィアに優しく語りかける。

シルヴィアの膣内は、太々とした魔物の陰茎で占領したままだ。これで終わりではない。まだまだ冥王の性欲は満たされていないし、シルヴィアの肉体も魔物の子種を求めていた。

「喜べ。これで終わりじゃない。腹が膨れ上がって、膣口から溢れ出るまで、子種をくれてやる」

「ひゃああん……っ♡」

ルキデイスはシルヴィアのおっぱいに嘔み付き、勃起した乳首を甘噛みで弄んだ。ちよつとした刺激にさえ敏感になつていたシルヴィアは、愛らしい声を上げた。

結合した陰部を通じて、シルヴィアの感情が伝播していく。膣穴は周期的に引き縮まって、ルキデイスの肉棒に射精をするように働きかけてきた。さつきまで男を知らぬ無垢な処女だったというのに、シルヴィアの膣穴は遊女顔負けの媚び方をしていた。

「いいひぐうう♡ またあ、いいかされちゃううううう♡」

眷族化の儀式はまだ終わらない。ルキデイスは、シルヴィアを背後から犯し始めた。四つ這いにさせて、むき出しの膣に肉棒を突き刺す。雌犬のような格好でシルヴィアは

喘ぐ。

ベッドシートを掴み、身体が動かないように踏ん張る。シルヴィアの尻肉とルキデイスの下半身がぶつかって、心地よい肉音が部屋に響いた。突かれる度、身体が揺さぶられてシルヴィアの金髪が乱れる。

「ああんっ！ んあああんっ！！ もつとおお！ もつとお、きもちいいのがきちゃうう……っ！！」

シルヴィアの膣は、ルキデイスの陰茎に馴染みきつていた。興奮で溢れ出した愛液が泡立っていた。

前触れなく、ぶつかり合う肉音が不意に止まる。

「ふえ……？」

ルキデイスはシルヴィアの腰を掴んで、尻を強引に引き寄せた。女陰の奥の奥まで亀頭が押し込まれる。引き縮まった膣内を突き進み、さらに深い領域へ侵入した。

「あつ！ ああつ！！ ああんっ！ すうっごいいのおおっ♡ くるうウウ……っ♡」

シルヴィアの子宮内に子種をぶち撒けられた。子宮と膣から精液が漏れないようにピッチリと陰茎で栓をしていたが、ついに決壊して逆流した精液が吹き出した。

絶頂に達したシルヴィアは、半透明の体液を膣から噴出させた。盛大に潮を吹いたシルヴィアは、両手の力が抜けてしまった。警備兵として、腕力を鍛えていたのに、もう

上半身を支えられなかった。

ルキデイスに尻を差し出したシルヴィアは、ベッドに顔を沈めながら、こみ上げる快楽の波に酔いしれる。

「いい感じに仕上がってきたな。膣穴はもう出来上がった。少し休憩をいれようかと思つたが、ここまで来たなら思う存分やってやろう」

シルヴィアの膣穴から、愛液で濡れた肉棒を抜き取る。子宮内に貯まつた精液が勢いよく漏れ出して、太腿を伝つて流れ落ちた。

「ひゃああん……っ♥」

凶悪な形状の陰茎は、愛液と破瓜の血で濡れている。亀頭や竿の太さは、人間の性器とは別次元だ。まさしく魔物の生殖器である。ルキデイスは肉棒の矛先を変えた。

膣口ではなく尻の穴にあてる。肛門がゆつくりと押し開けられる感触を感じ取つたシルヴィアは声を上げる。

「ひゃ……っ?! そつちはだめええっ!! らめええ——っ!!!」

口では嫌がるが、尻は突き出したままだ。ルキデイスの硬くなつた亀頭は、緩みきつた門をこじ開ける。

「力むな。もつと力を抜け。王の命令だぞ。従僕」

ルキデイスが命じる。冥王の命令は魔物にとって絶対だ。眷族化しつつかあるシルヴィアは、冥王の命令に抗えない。

「あああん♥ んふうううひゃああああ♥ あっ♥ あああん♥ 太いのがきてるゆうう……っ! だめなのに、お尻はらめえなのお……!!!」

膣穴を征服したルキデイスは、尻穴の蹂躞を開始する。最初はゆつくりと動かし、次第に速度を上げて、奥へ奥へと入っていく。

初めてのAnalセックスだというのに、痛みはなかった。最初の抵抗は未知への恐怖でしかなく、処女を散らした時と違つて痛みはなかった。

膣穴とは違う快楽で、シルヴィアの心は侵食されていった。昼過ぎから始まつたセックスは、日付が変わる時間まで続いた。

眷族の誕生を喜んだルキデイスは、シルヴィアが失神するまで犯し続けた。けれど、さすがにやりすぎてしまったと冥王は反省する。

やりすぎて壊れていないか心配になつたが、シルヴィアの瞳は深緑のまままだ。濁つていないのなら大丈夫であろう。「さすがに疲れた」

最後はシルヴィアの顔面に精液をぶっかけて、眷族化の儀式を終えた。シルヴィアの膣穴と尻穴は精液が垂れ流しになっている。

美しい金髪は乱れて、顔は精液でずぶ濡れた。意識はな

く、反応もしない。だが、シルヴィアは目を閉じていない。恍惚とした表情で微笑んでいた。

「お疲れ様でした、ご主人様」

シェリオンは主人の労をねぎらった。もう一人の眷族ユファは、主人の汚れた性器を綺麗に舐め、汚れを取っている。他の雌を犯しまくった陰茎を、嫌な顔一つせず丁寧に舐める。

隙あらば子種を賜ろうと、いやらしい舌使いで誘ってみるが、ルキデイスは反応してくれなかった。

ここからの連戦は厳しいものがある。ましてや相手がユファだとこちらの身が持たない。

「シェリオン。シルヴィアの股を開かせろ」

「淫紋いんもんを刻むのですね？」

「ああ、そうだ。シルヴィアに眷族の証を授けてやる。喜ばしい夜だ。ついに五人目の眷族が誕生した」

冥王は、指輪に保存していた魔導書を取り出す。

第一の魔導書〈レスレクティオ〉は、眷族の下腹部に淫紋を刻み、冥王と眷族の繋がりをさらに強化することができる。淫紋がなくとも眷族にはなれるが、淫紋を刻むことが眷族の管理が容易になる。

魔導書〈レスレクティオ〉は、登録された眷族の状態を記録してくれる。産んだ子供の数を把握でき、さらに眷族

の居所を探すなどの機能がある。眷族化した雌は、全て魔導書に記録されている。

「これで貴様は冥王の眷族だ。冥王の祝福を受け取るがい。シルヴィア・ローレライ」

魔導書が発動するとシルヴィアの下腹部に紋様が浮かび上がる。淫紋を除去する方法はない。服従の印は冥王との繋がりを証明する証だ。

シェリオンやユファの肉体にも淫紋が刻まれている。刻まれる淫紋には、古代数字が隠されている。最初の眷族であるシェリオンには〈一〉の数字があり、ユファには〈二〉の数字が刻まれていた。

——シルヴィアに刻まれた淫紋には、〈五〉の古代数字が秘められている。



シルヴィアがルキデイスに囚われてから一週間が過ぎた。冥王と交わった人間の雌は、苗床か眷族のどちらかに転生する。シルヴィアは冥王の瘴気と魔素を受け入れ、眷族化に成功した。

肉体的な変化はすぐに現れた。精液で膨れ上がっていた下腹部が、一段と膨らみを作り、妊娠中期の妊婦腹となっ



た。

シルヴィアの身体は、たった数日で母親になったのだ。ここまでポテ腹になったら、普通の服を着るのは難しい。そういうわけで、シルヴィアはルキデイスが用意してくれた妊婦用のドレスを着ていた。

黒いマタニティドレスを着こなしているシルヴィアは、もはや警備兵ではない。子宝を授かった幼妻にしか見えなかった。

「似合ってるじゃないか。黒絹にするか、白絹にするかで、とても迷った。だが、やっぱり黒を選んでよかった。そうやって健気に睨んでいるところが、すごく愛らしいぞ。そんな顔をしていても、シルヴィアは冥王の眷族だ。どんな形であれ、俺と貴様は夫と妻だからな。くつくくく！ 存分に可愛がって、子供を沢山産ませてやるぞ」

ルキデイスは嬉しそうに笑っていた。その笑みに嘲りは含まれていない。本心からシルヴィアを褒めていたし、懐妊を喜んでいた。無邪気に喜んでいたので、シルヴィアは正面から罵詈雑言を吐きつけることができなかった。

せめてもの抵抗として、シルヴィアは不機嫌そうな顔を作り、ルキデイスを睨み付ける。とはいっても、眷族化したシルヴィアは、冥王であるルキデイスに逆らえない。内心では主人の言葉に歓喜していた。

「もつと、もつと私を愛してほしい。ルキデイスに抱きついて、淫欲を解放してしまいたい♥」

同じ部屋にいただけで、子宮が疼いた。心中の奥底に潜む、もう一人のシルヴィアは、快楽を貪欲に求めている。まだ素直になれていないだけで、遠からず邪な自分に飲み込まれてしまうのは分かっていた。



「赤ちゃん……。それも魔物を身籠もるなんて……」

シルヴィアは膨らんだ自らの下腹部に手を添えた。引き締まっていた腹筋はもうない。丸みを帯びた腹が出っ張っている。胎内では、ルキデイスの精子とシルヴィアの卵子が結びついて、魔物の受精卵が誕生しているはずだ。

メイドのシェリオンが言うには、最初の出産までに約一ヶ月かかるそうだ。腹が大きくなったのは、子宮が肥大化したせいだ。胎児はまだ受精卵の段階らしい。

半月かけて内臓が産に耐えられるように変化し、さらに半月かけて魔物の赤子を子宮で育てる。そして出産に至る。

冥王の干渉で妊娠期間を短くしたり、延ばすことができるそうだ。何もしないなら、約一ヶ月でシルヴィアはルキ

デイスの子を産み、魔物の母親となってしまう。

「出産は幸福です。初めてだからといって、恐れる必要はありません。出産の痛みすら、快感に変わってしまいます」
複雑な表情を浮かべているシルヴィアに向かって、経験者のシェリオンは語る。

メイドのシェリオンは最初の眷族だ。これまでに冥王の子を数多く産んでいる。シェリオンが産んだ魔物は、サピナ小王国を裏から支える優秀な労働力となっていた。

「私が恐れているのは出産じゃないわ。自分の心が変わっていくことが恐ろしいの。私はまだ人間らしい感情を残しているけれど、時間が経てば、貴方達みたいになっちゃう。ルキデイスをご主人様と崇めて、醜態を晒すふしだらな女に……」

初セックスでかなりの痴態を晒している気がしたが、そのことは考えないようにしていた。

「強気なことを言われるのですね。だから、ご主人様は貴方を気に入っているのでしょう。今まで眷族になった四人は、望んで身を捧げています。シルヴィアのように反抗していません。眷族になったからといって、心変わりするとは限りませんよ。眷族化が精神に与える影響は、まだ分かっているから」

「自分から望んだ……？ シェリオンだって眷族になる前

は普通の人間だったんでしょ……？ 無理やりじゃなくて、シェリオンは望んで魔物になったっていうの……!？」

「私は奴隷でした。奴隷の中でも獣人は、最下級の扱いです。家畜と呼ばれていたことのほうが多かったと思います。牛の角や尻尾を持つ獣人は、家畜小屋に住む畜牛と同じ扱いです。私のことを人間だと認めてくれたのは、ご主人様だけです。私は眷族となる前から、ご主人様に恋していました。眷族となれず苗床になるとしても、私は身を捧げていました。下種な人間に媚びへつらって、家畜として一生を終えるよりは、苗床になったほうが絶対に幸せです」

シェリオンは陰りのない笑顔で堂々と断言した。

「ユファも私と同じような境遇です。病に罹って捨てられたところを、慈悲深いご主人様が拾ってくれたのです。私とユファは最初から、未練なんて抱いていません。ご主人様のいない世界なんて、想像したくありません。シルヴィアが今後、ご主人様に対してどのような感情を抱くのか。私には分かりません。魔物になると、冥王に反逆できなくなります。ですが、好意を抱くようになるとは限らないかもしれません」

ルキデイスが出かけている間、シルヴィアはシェリオンと二人きりで過ごしていた。

シルヴィアに与えられた部屋は、地下室を異空間化させ

た場所であり、やはり窓や扉はなかった。大きなベッドが置いてあるだけの質素な部屋だ。

シエリオンがいない時は、ユファがやってきて世話をしてくれた。シルヴィアは監視だと思いい込んでいたが、実は見守っているというのが正しい。

眷族化に成功したとはいえ、何が起るか分からない。一人にさせるのは危険と判断して、シエリオンかユファを置いていた。

この日、ルキデイスはユファを連れて外回りに出ていた。裏では人類滅亡を企む冥王であるが、表向きは祖国のために奮闘する学徒だ。

ラドフィリア王国を見分し、優れた統治制度と社会基盤を学び、優秀な人材を見出してサピナ小王国へ招致するという重要な公務がある。

「ユファから聞いたかもしれませんが、私からも眷族について説明しておきます。まず眷族というのは魔物です。シルヴィアは、もう人間ではありません、眷族になったばかりなので、身体が変化しきっていませんが、いずれは魔物の姿を得ることができません。人間の姿を失うわけではないので、そこはご安心ください。魔物に転生しても、人間の姿を維持できるのが眷族の能力です。眷族は二つの姿を持つ生き物なのです」

「魔物の姿……？ シエリオンやユファは、魔物の姿を持つているの？」

「眷族は例外なく、魔物の姿を持っています。人前では見せないようにしていますが、本気で戦う時や興奮した時は、化けの皮が剥がれることもあります」

「私もそうなるとしたら、憂鬱になるわ……。真正正銘のモンスターになってしまっただけでしょ。シエリオンが、どんな姿の魔物になってしまったのか、ここで見せてくれない？」

「ユファにお願いしてください。喜んで正体を見せてくれると思いますよ。私の場合、ここで魔物の姿になると、着ているメイド服が破損してしまいます。この服は私専用の特注品なので、無駄にすることはできません」

シエリオンの乳房は、そこそこ巨乳のシルヴィアより遥かに大きかった。巨乳でなく超乳と表現してよいサイズだ。単に大きいというだけではなく、シエリオンの乳は下品に垂れていない。綺麗な形を保ったまま巨大なのである。巨大と優美を兼ね揃えた奇跡的な美乳だ。

難点があるとすれば、着る服が限定されてしまうことだ。シエリオンのバストサイズだと、普通の服を着用するのは難しい。なので、メイド服は超乳に適合する乳袋付きのものを特注している。

その悩みはシルヴィアも共感できた。胸の大きいシルヴィアも、警備兵の制服や革鎧がきつくて難儀した経験があった。バストサイズのせいで、男の警備兵に茶化されるのは、とても恥ずかしかった。露出の多い服を着ると、自然と視線が集まってしまう。なので、わざと厚着をすることさえあった。

ルキデイスが用意してくれた妊婦用のドレスだって、乳の形がくつきりと浮かび上がってしまう。この格好で、表通りを歩くのは抵抗を感じる。

眺めている男達にとつては眼福だ。しかし、粘っこい視線を集めるのは恥辱でしかない。

シルヴィアとは対照的に、ユファはあえて挑発的な薄着を着ている。ユファは普段から、ルキデイスを誘惑するタイプだ。そもそも人間の視線なんて眼中にないので、気にしていないようだった。ルキデイスが巨乳好きなのは明白だ。ならば、自らの持つ巨乳をアピールして、寵愛を受ける。その行動は実に合理的である。

ただし、ルキデイスは常識人だった。不埒すぎる衣装を着ている時は、身だしなみを注意し、上着の着用を命じていた。

「する気はないと思いますが、眷族は自殺できませんよ。魔物は自殺行動を取れません。魔物は殺戮衝動と破壊衝動

を抱えています。ですが、その衝動を自身に向けることはできないようです。冥王の絶対命令権を使えば、魔物であっても自殺させることができますけどね。ご主人様の命令は、どんな内容であっても、全ての魔物に有効です」

（自殺……。シェリオンに言われるまで気付かなかったわ。誰かに言われなければ、思いつくことすらできなくなっているみたい。以前の私だったら、『魔物の赤子を産むくらいなら死ぬ！』なんてことも考えたのだからけど……。そんな気概は湧いてこないわ。これも冥王の眷族になった影響……？）

「眷族は三大欲求が欠落します。『睡眠欲』『食欲』『性欲』が魔物にはないからです。眷族となった私達は不眠不休で働きます。大気のマナを吸収して魔素を補給できるため、食事も不要となります」

「睡眠や食事がいららないのは気付いてたわ。この一週間、私は眠ってないし、何も食べてない。口に入れたのは精液くらい」

「とても美味しそうに頬張ってましたね。私も最近はお無沙汰なので羨ましかったです」

「とつ、とにかく、睡眠欲と食欲がないのは分かるわ。だけど、性欲がなくなっているのは間違いじゃないの？ 私はルキデイスに犯されている時……。あまり言いたくないけ

れど、すぐく乱れてしまおうわ」

「それは冥王との性行為だからです。魔物には三大欲求がありません。ですが、この世に一体だけ例外の個体が存在します。それが冥王なのです。冥王は他の魔物と違って、三大欲求があります。眠らなければ、ご主人様は衰弱してしまいます。食べなければ、飢えて動けなくなります。そして繁殖をするために性欲があります。眷族は冥王から性的快感を分け与えられているに過ぎません。たとえば自分を慰めようと自慰行為^{オナニ}をしても、眷族は快楽は得られません。納得したいのなら、試してみてはいかがですか？」

「それは遠慮しておくわ……」

ちなみに、この事実を発見したのはユファだ。

自慰で気持ちよくなれないと発表した時、冥王は呆れてしまった。だが、検証してみるとその通りであった。ユファ以外の眷族も自慰で性的快感を感じることができなかつた。大人の玩具などを駆使したが、無駄であつた。

この検証によって、眷族は他の魔物と同じで三大欲求が欠落していること、そして冥王だけが三大欲求を持っていることが判明した。

この発見で気を良くしたユファは、眷族巨乳説を主張し、シルヴィアが眷族化したことで、自説を訂正して巨乳処女説を打ち出していた。

ルキデイスは懐疑的である。だが、シルヴィアは眷族になつてしまった。結果が示されたので、ユファの巨乳処女説を仮説として認めざるを得なかつた。もつとも、評価はするが定説とは認めていない。ルキデイスは「いくら何でも、それはない」と思っているからだ。

「——ああ、そうでした。一番重要なことを言っていないませんでしたね。私としたことが、うっかりしていました」

シエリオンは不気味に口元を吊り上げ、シルヴィアに告げた。

「私達は、身も心も魔物となつていきます。魔物は殺戮衝動と破壊衝動の塊です。人間を殺したくなつたり、文明的な物を破壊したくなつたりします。街中で暮らしている時は、本当に苦痛ですよ。ご主人様のために、人間どもを殺したいというのに、それができないのですから……」

魔物に陵辱され、魔物の子を孕み、魔物と成り果てる。そこまではない。それはシルヴィア自身が被害者でしかないからだ。しかし、魔物となつたら、いつかは加害者となる。

シルヴィアという魔物は、誰かを殺すようになってしまふだろう。また、彼女が産んだ魔物は、人間を殺していく。シルヴィアの胎内で育っている赤子は、人間の敵として、

この世に産まれ落ちる。

「……………っ！」

シルヴィアは膨らんだお腹を、無言で見つめていた。体内では刻々と、ルキデイスの子が成長している。体

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>